平成29年度グローバルリーダーズハイスクール(GLHS)	評価シート	
------------------------------	-------	--

府立北野高等学校

事業目的	大項目	小項目	今年度の 取組方針	取組	取組指標	前年度実績	目標値	実績	実績の詳細	自己評価	成果指標	前年度実績 目標値	実績	実績の詳細	自己 次年度の 評価 取組方針	評価審議会の評価 コメント	評価
	I. 確かな学力の向上を図る '小項目(はぐくみたい力)' - ・言語活用力 - ・ICT活用力 - ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	①言語活用力·ICT活用力	充実	校内外成果発表会の実施	校内外成果発表会の発表本 数	校内666 校外8		校内758 校外24	校内 ●課題研究 □頭(プレゼン)発表 131 ポスター発表 54 ●学校設定科目「国際情報」 理科発表 180 英語発表 200 統計発表 104 ●学内留学 43 ●シンガポール研修前プレゼン 12 ●即興型英語ディベート予選会 10 校外 ●京大防災国際会議 1 (4人) ●カナダ国際蛋白質学会 1 (1人) ●大阪サイエンスデイ 1 (1人) ●国際物理オリンピック 1 (1人) ●即興型英語ディベート関西大会 2 (6人) ●府高等学校英語暗唱弁論大会 2 (2人) ●SGH全国高校生フォーラム 1 (2人) ●即興型英語ディベート全国大会 1 (3人) ●加賀ロボレーブ国際大会 1 (1人) ●大教大附属平野招待発表 1 (5人) ●高校生公開討論会 3 (12人) ●GLHS 1 0校合同発表会 1 (8人) ●SGH甲子園 1 (4人) ●霊長類学会 1 (6人) ●国連平和大使 1 (1人) ●税に関する作文コンクール入賞 4 ●犬山プリマーテス研究会優秀発表賞 1 (3人)	А	当該アンケートにおける生徒の 肯定回答率	89.9% 90.0%	6 92.3%	「国際情報」のアンケート「プレゼンファイルの作成技能が修得できた」、「プレゼン発表の技能が向上した」、「クラス全体としてプレゼンレベルが向上した」及び学内留学アンケート「以前より人前で発表することに抵抗が少なくなった」の肯定率の平均	B 継続	「北野生の凄さを見せる」をキーワードに学校づくりを進めており、生徒の校内外で活躍する機会を数多く設定し生徒を後押ししていることが、コンクール・コンテストや課題研究発表への参加実績として現れている。特に、校外で活躍するという点で大きな成果をあげていることは評価できる。また、オールイングリッシュで受け	
		②英語運用能力	充実	学内留学講座の実施	参加者数	168人	168人	178人	教育学コース 35人 ビジネス学コース 36人 心理学コース 36人 天文学コース 37人 環境学コース 34人	В	当該アンケートにおける生徒の 肯定回答率	83,2% 90.0%	6 94.9%	学内留学アンケート「以前より英語でのコミュニケーションに抵抗がなくなった」及び「以前より英語によるコミュニケーション能力を高めたいと思うようになった」の肯定率の平均	A 継続	る大学の教養レベルの講義(学内留学) や講演会への参加が増えるとともに、それらの取組に対するアンケートでの高い肯定回答率からも、内容の充実ぶりが窺える。 「外に開く」ことで、生徒にチャレンジ精神を育むとともに、生徒一人	AA
		③英語運用能力	充実	英語による講演・大学院留学生との 交流会実施	参加者数	493人	800人	790人	●「英語の達人」講演会(松本道弘氏) 生徒 360人、保護者・府教員等 15人 ●外務省出前授業「EUがあなたの学校にやってくる」 生徒 228人、保護者・府教員等 25人 ●英語特別講演会(京都大学谷ロー美氏) 生徒 32人、保護者 5人 ●卒業生による講演会(海外医療事情) 生徒 90人 ●大学院留学生との交流会 社会系 16人 英語系 19人	В	当該アンケートにおける生徒の 肯定回答率	79.7% 85.0%	5 100.0%	英語特別講演会のアンケートの「講演会に参加してよかったと思いますか」の肯定率	A 継続	ひとりが有する優れた力をさらに伸ばすことができている。今後も、北野生の凄さを全国に示す取組のさらなる拡充に期待したい。	
	II. 豊かな感性と、たくましく生きるための健康と体力をはぐくむ	④違いを認め共に生きる 力・紛争を解決する力	充実	異文化理解教育の実施	海外の高校や大学等へ訪問 した人数と受け入れた人数 の合計 (一日交流は含まない)	108人	108人	103人	渡航 ●ハワイ 32人 ●ケンブリッジ 1人 ●シンガポール 44人 ●台湾 15人 ●シアトル 5人 ●カナダ 1人 ●インドネシア 1人 ●オーストリア 1 人 受入 ●シアトル 4人 *一日交流の建国高校、セントポールカレッジは除く。	В	当該アンケートにおける生徒の 肯定回答率	82.6% 90.0%	84.8%	ハワイ研修アンケートの肯定率	C 充実	授業第一主義と部活動の充実を柱とした「真の文武両道」をめざし、受験勉強だけではなく、部活動において体を鍛えたり、たくましい心を育むという校風を継承している。 1年生を対象とした宿泊研修では	
	小項目(はぐくみたいカ) ・違いを認め共に生きるカ ・ 共感カ ・ 協調性 ・ 紛争を解決するカ	⑤共感力·協調性	継続	宿泊研修における チームビルディング講座の実施	参加者数	1年生全員	1年生全員	1年生全員	宿泊研修(4月27日・28日)でチームビルディング研修の実施	В	当該アンケートにおける生徒の 肯定回答率	95.9% 95.9%	99.4%	宿泊研修アンケート「宿泊研修はど うでしたか」の肯定率	A 継続	チームビルディングに取り組み、肯定回答率99.4%からも、人間関係づくりやクラスづくりのための重要な行事となっていると言える。また、ハワイや台湾への研修など、	Α
校 独自	・健康・体力 ・その他	⑥バランスのとれた豊かな 人間性の育成	継続	部活動の充実	部活動の加入率	95.6%	95.6%	94.9%	加入率 1年 96.4% 2年 93.3% 平均 94.9% 加入人数 運動部 618人 文化部 414人 合計 1032人 延べ加入率 103.3%	В	当該アンケートにおける生徒の 肯定回答率	86.1% 90.0%	88.5%	生活アンケート「部(同好会)活動 を総合的にどう評価しますか」の肯 定率	B 継続	海外の高校生との交流を継続的に実施し、生徒の異文化理解と協調性・ 多様性を育んでいることは評価できる。	
組	Ⅲ. 高い志をはぐくみ、進路 実現をめざす 小項目(はぐくみたい力) ・規範意識 ・高い志 ・その他	⑦高い志を育む	充実	各界リーダーによる講演会の実施	講演の回数及び講座数	13回 41講座	15回 50講座	16回	●「知的世界への冒険」 (1年対象) 1回 5講座 ●「キャリアガイダンス」(1年対象) 1回 14講座 ●「学部学科ガイダンス」(2年対象) 1回 13講座 ●SGH課題研究講演会 (1年対象) 2回(アジアフィールドワーク報告、科学論文の書き方) ●SGH課題研究講演会 (2年対象) 英語 4回(陳立行氏、ポンウピタックウンティピア氏、市川顕氏)、社会 1回(岡本正明氏) 理科 2回(金哲佑氏、信川正順氏) ●SGH学習会(1・2年有志対象) 1回(市川顕氏;高校生公開討論会向け) ●各種講演会「防災を考える」1回(野尻紀恵氏)、「今ここにある『貧困』」1回(川口加奈氏)、「Leave it! Love it! Live it!」1回(大川郁子氏)	В	当該アンケートにおける生徒の 肯定回答率	90.1% 90.1%	6 93.9%	「知的世界への冒険」「キャリアガ イダンス」「学部学科ガイダンス」 の各アンケートの肯定率の平均	B 充実	高い志の育み、学習意欲の向上をめざし、様々な取組を行っている。生徒の知的好奇心を高める講演会や自らの将来について考えさせるガイダンスは、高い肯定回答率からも、生徒にとって魅力ある内容となっていることがわかる。 SGHの取組の充実をめざし実施している課題研究講演会は、生徒の課題	
		⑧キャリア教育の推進	継続	若手研究者による学部・学科ガイダ ンスの実施 社会人による職業ガイダンスの実施	生徒の参加率	100%	100%	100%	学部学科ガイダンス	В	当該アンケートにおける生徒の 肯定回答率	90.2% 90.2%	95.5%	「学部学科ガイダンス」の肯定率	A 継続	研究に対する意識を高めることに大きく寄与している。また、京都大学や大阪大学などと連携した行事にも多くの生徒が積極的	AA
知識基盤社	<u></u>	⑤高大連携の推進	充実	大学におけるセミナー等への参加	セミナー等に参加した生徒 数	649人	670人	619人	京都大学 1 年宿泊研修京大ツアー 360人、京大サマースクール 7人、京大キャンパスガイド 94人、京大ELCAS 6人 大阪大学 阪大キャンパスツアー 74人、阪大医学部早期医療体験プログラム 1人、学校設定科目「阪大基礎セミナー」 14人 「阪大SEEDSプログラム 6人、GLHS10校合同発表会 28人 大阪教育大学 「教師にまっすぐ」 2人、大教大キャンパスガイド 3人 関西学院大学 「高校生公開討論会」 12人 府教育庁主催等 「科学の甲子園」 6人、「京都・大阪数学コンテスト」 6人	С	当該アンケートにおける生徒の 肯定回答率	92.8% 92.8%	6 96.7%	阪大キャンパスツアー、大教大キャンパスガイド、京大キャンバスガイド、京大キャンバスガイド、阪大基礎セミナー、1年宿泊研修の肯定率の平均	A 継続	に参加しており、アンケートによる 肯定的評価が非常に高い。 北野高校では早い段階から、将来の 目標を持ち、進学したい大学や学部 を決め、学習に取り組む生徒が多く いることは、こうした取組の成果で あり、評価に値する。。	
会をリーじ	IV. 教員の指導力向上をめざす	⑩授業力向上	充実	校内外の授業見学・研究協議の実施	授業見学・研究協議をした 教員の割合	85.5%	90%	96.7%	校内で授業見学または授業公開を1回以上実施した教員の実人数の割合(分母は非常勤講師を除く教員数) 実人数 58人 / 60人	В	授業アンケートによる生徒の肯 定回答率	73.3% 80.0%	82.8%	学校教育自己診断(生徒対象)「授業は興味深く満足できるものである」の肯定率	A 継続	非常に高い授業内容が教員に求められる中、生徒対象のアンケートで肯定回答率が昨年度実績を大きく上回ったことは評価できる。このこと	
- する人材の	小項目(はぐくみたい力) ・授業力向上 ・教材開発 ・その他	⑪若手教員の指導力向上	充実	他校と連携した研修講座の実施	指導力向上研修の実施回数	150	200	240	校内 公開研究授業 延べ 14回 内訳 初任者 2人× 2回、2年目 3人× 1回、ミドルリーダー 2人× 1回、10年研 2人× 2回 希望者 1人× 1回 校外 研究授業参加 延べ 10回、14人 内訳 大手前(3)、岸和田(1)、伯太(1)、三国丘(1)、附属天王寺(1)、灘(1)、今宮(2)、附属平野(2)、箕面(1) 青山学院(1)	А	当該アンケートにおける参加教 員の肯定回答率	100% 100%	100%	参加教員のアンケートや感想から読み取れる肯定率	B 継続	は、校内での教員間の授業見学のみならず、保護者や学外の方に広く授業を公開したり、校外での研究授業に参加するなど、「授業第一主義」を掲げ、学校として組織的に授業改善に取り組んだ成果と言える。	А
育 成		⑫授業力・指導力の向上	継続	保護者を含む外部への授業公開	保護者を含む外部からの見 学者数	658人	700人	709人	公開授業(保護者参加数) 622人 内訳:前期(6月14·15·16日) 359人、後期(11月7·8·9日) 263人 公開研究授業(府教員等参加数) 52人(延べ数) 学外からの見学者数 35人 内訳 都立三田高(2)、富山中部高(2)、山形東高(2)、大阪教育大学(10) 関西学院大学(4)、岐阜大学(1)、四日市高(4)、新潟県教委(8)、高岡高(2)		当該アンケートにおける参加者 の肯定回答率	97.3% 97.3%		保護者の公開授業後アンケートにお ける肯定率	B 継続	今後さらに、生徒にとって「主体 的・対話的で深い学び」が実現でき るよう、さらなる授業改善に取り組 んでもらいたい。	
		③10校が共通で実施する 学力調査									学力調査の結果	1年⇒2年:+0.06	(A)、2年⇒;		会資料3に明記	学力調査の結果において、北野高校では、生徒が高校入学後も高い志をもち意欲を高め、学習に取り組んでいる様子が窺える。また、大学入試センター試験5教科7	
	V. 総合的な学力の測定	④大学入試センター試験へ の参加									大学入試センター試験 5教科7科目受験者の割合	93.2% 95.0%	94.4%	301名/319名	B 継続	科目受験者の割合を増やしつつ、こ こ数年、得点率の平均も着実に伸ば し続けている。生徒全体の学力向上 が図られていることが実証されてお	AAA
		⑤大学入試センター試験の 結果									5教科7科目受験者における得点 率の平均	79.9% 80.0%	82.2%	5教科7科目受験者のうち成績報告 者301名の平均点739.9点より 739.9/900	A 継続	り、またその成果として進学実績を 伸ばしていることは高く評価でき る。	
	VI. 課題研究活動	⑥課題研究活動									学会や大学での研究会・研究紀 要等での発表数	214 214	2件	京都大学防災国際会議 犬山プリマーテス研究会 (優秀中高生発表賞)	B 継続	オール文理2年めとなり、2年生全員が課題研究に取り組むことになった。この対象生徒拡大への対応には成功したようだが、特に文系の課題研究には依然として課題があると聞	Δ
	VI. DARESON DELLE	⑪コンクール・コンテスト 等の成果									全国規模のコンクール・コンテスト等の入賞者数(「全国レベル」には全国大会出場者を含む)	①府レベル ①府レベ 1人 10人 ②全国レベ ②全国レ ル ル 9人 5人		①京都大阪数学コンテスト 優秀賞 1 奨励賞 2 ②国際物理オリンピック 銀メダル	C 充実	く。 引き続き、学校として課題研究の質 向上に努め、生徒の持つ力をより一 層引き出してもらいたい。	A
通の取り	Ⅷ. 英語運用能力	®TOEFLiBT(チャレンジを含む)									TOEFLiBTスコア(チャレンジ 含む) ①80点以上の人数 ②60点~79点の人数	①2人 ②9人 ②5人	①6人 ②16人	1年 1名(85点) 2年 3名(98点、87点、104点) 3年 2名(89点、81点)	A 継続	SETの配置により、生徒に英語4技能を身に付けるノウハウを英語科全体にうまく共有しており、 TOEFLIBTチャレンジで、目標を超える結果が出たことは高く評価でき	AA
	41. 天品连历形力	⑨TOEFLiBT(チャレンジ を含む)以外の英語外部検 定試験									TOEFLiBTチャレンジ受験者ス コアの平均点	43点 46点	50点	1年 45点 (30人) 2年 50点 (31人) 3年 58点 (19人)	A 継続	る。 今後も、この間の取組をさらに充実 させ、その成果を広く発信していっ てもらいたい。	
		⑩スーパーグローバル大学 (タイプAトップ型)への 進学									スーパーグローバル大学(タイ プAトップ型)1 3校への進学 者数(1 浪含む)	162人 162人	、 189人	現役140人、1 浪48人	A 継続	海外大学進学者はいなかったが、そ の他の進学実績に関する指標におい て、昨年度実績をはるかに超える結	
	Ⅷ. 進学実績	②進学実績									難関国立大学(東大・京大・阪 大)現役・浪人合格者数	150人 150人	. 170人	東大 7人(現6・浪1) 京大84人(現61・浪23) 阪大79人(現66・浪13)	A 継続	果となり、大きな成果を上げたと言える。 特に、国公立大学現役進学者数に加え、難関国立大学(東大・京大・阪大)現役・浪人合格者数を大きく伸	AAA
	地。 建丁大顺	②国公立大学への進学									国公立大学現役進学者数	175人 175人	、 199人		A 継続	ばしたことは高く評価できる。 北野高校には、平成28年度入学生からすべてのクラスを文理学科にしたことで、より学力の高い生徒が多く入学している。来年度3年生につい	
		②海外大学への進学									海外大学進学者数(1浪含む)	1人 4人	OΛ		C 充実	ても継続して、進学実績を伸ばせる よう、取組のさらなる充実を図って もらいたい。	

総合評価

北野高校は大阪のナンバースクールとして、アカデミックで自由闊達な校風のもと、「真の文武両道」をめざし、 勉強だけでなく、学校行事や部活動等にも積極的に取り組んでいる。また、「授業第一主義」を掲げ、学校として組織的な授業改善に取り組み、生徒の学力を向上させてきたことに加えて、「北野生の凄さを見せる」をキーワードに、コンクール・コンテストや課題研究発表に参加することを後押しし、生徒の主体性や高い志を育んできたことが、進学実績に繋がっていると考える。今後も引き続き、授業等で身に付けた高度な知識や豊かな語学力・コミュニケーション能力、また、探究活動で育んだ社会の課題に対する問題解決力などを活かし、将来、グローバルな舞台に積極的に挑戦し活躍できるグローバルリーダーの育成に努めてもらいたい。

府立豊中高等学校

 自己評価の基準
 A・・・計画以上
 A・・・・高い成果をあげている

 自己評価の基準
 A・・・・成果をあげている

 C・・・計画以下
 AAA・・・・きわめて高い成果をあげている

 AA ・・・・成果をあげている
 A ・・・・成果をあげている

 B ・・・・取り組んでいるが工夫改善の余地がある
 C ・・・取組の見直しが必要である

資料2-5

事業		 大項目	小項目	今年度の 取組 取組	取組指標	前年度実績	目標値	実績	実績の詳細	B. □ 成果指標	前年度実績	目標値	実績	実績の詳細	次年度の 評価審議会の評 取組方針 コメント	価 ■ = 17/45
⊟₽Л	I	. 確かな学力の向上を図る	①言語活用力·	取組力針 授業成果発表会の実施 (豊高プレゼンテーショ	ン) 校内成果発表会の質を 会 上させる	本、ポスター発表 24本 ・SGHロ頭発表3		本、ポスター発表 33本 ・SGHロ頭発表4	平成29年度は池田市アゼリアホールで実施したが、今年度は2月6日に豊中高校において「豊高プレゼンテーション」を実施した。海外研修・SSH課題研究・SGH課題研究の代表口頭発表及びポスター発表を行うとともに、造形二科の作品展示を同時開催し、豊高生1,2年生全員が	プレゼンテーション能力 が向上したと回答した発 表生徒の割合	94%	100%	96%	事後アンケートで、「わかりやすく表現する力が高まった」と回答した割 合	取組方針 コメント 豊高プレゼンテーションは、発表だて件増え、発表内容も毎年充実している。SSH・SGHの課題研究の発表の場としても位置付けられ、重要	
		小項目(はぐくみたい力) ・言語活用力 ・にT活用力 ・読解カリテラシー ・科学的リテラシー ・英語運用能力 ・その他	②英語運用能力 科学的リテラ シー 言語活用力	②SGH課題研究成果発表 各種コンテスト (英語ディベート・科学 子園・海外コンテスト等 及び 豊高グローバルスタディ への積極的参加	①国際大会参加数 ②全国大会参加数 ③近畿(西日本)大会	22本 ①0回 ②13回	本、ポスター発表 21本 ① 1回 ② 10回 ③ 3回 ④ 140回	本、ポスター発表 23本 ① 1回 ② 6回 ③ 3回 ④ 145回	成果を発表する場となった。 ①SISC 2017(Singapore International Science Challenge 2017) The Grand Champion Award 1名 The Best Engineering Product Award 1名 The Most Innovative Design Award 1名 ②SSH生徒研究発表会、JICA「国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2017」学校賞、SGH甲子園、2017年度SGH全国高校生フォーラム、ディベート全国大会POI賞、日本物理学会ジュニアセッション奨励賞 ③英語パフォーマンス甲子園プレ大会グランプリ、科学の甲子園大阪府第3位、大阪教育大学作文コンクール2名佳作 ④1~2年生計24名で火・木曜日放課後、即興型英語ディベート、月・	英語運用能力等に自信がついたと回答した参加生徒の割合	100%	90%	100%	・個々の大会に出場した生徒は、全員英語運用能力・プレゼンテーション能力に自信がついたと回答した割合。 ・豊高グローバルスタディーズに参加した全生徒が、英語運用能力・プレゼンテーション能力に自信がついたと回答した割合。	本学校行事となっている。96%が表現力が高まったと答えており、そ表生徒にとって貴重な体験となっていると言える。 課題研究の実践と発表会実施の成りとして、多くの生徒がコンクール・コンテストへ参加・入賞している。特に、シンガポールで行われた国際的な大会で3つの賞をとるなど、英語運用能力・プレゼンテーション負力が着実に身に付いていることが知える。	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
			③英語運用能力	再編 ・リスニング講習	• 講習参加者数	• 102名	• 100人	•119人	金は、ディベート練習・読書会等を行っている。 ・1年・2年 計79人参加 ・3年 40人参加	英語運用能力に自信がついたと回答した参加生徒の割	100%	100%	100%	講習を通して、大多数の生徒が受験するセンターリスニングの問題のコツをつかみ、自信をつけさせる。	また、即興型ディベート講習やリスニング講習など、生徒の英語運用能力の向上に取り組み、参加生徒が多くといる。 さい きゅうしている はんしょう はんしょく はんしん はんしん はんしん はんしん はんしん はんしん はんしん はんし	
	II < (d	. 豊かな感性と、たくまし 生きるための健康と体力を ばぐくむ	(4)違いを認め共に 生きるカ	継続 英国語学研修の実施	研修参加者数	37名	35名	40名	7月22日(土)~8月3日(木)(13日間)、イギリス・バースにて、ELAC(語学学校)主催のインターナショナルプログラムに参加し、大学において英語の授業はもとより、ヨーロッパ各国から訪れた同年代の若者と諸活動を共にすることにより、コミュニケーションカを高めた。	章 異文化について理解を深めることができたと回答した参加生徒の割合	100%	100%	100%	ホームステイ・授業・他国の生徒との交流を通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、メンタルタフネス、異文化に対する偏見のコントロール、日本人というアイデンティティの認識などが養うことができ、今後の英語学習に対する課題を見いだし、目標に向かって学習意欲を高める機会となった。今後は、英語実力テスト(GTEC等)の結果を経年観測して、この研修旅行に参加したことがその後の学習にどのような影響を与えているか見ていきたい。	ことは評価できる。 イギリスを訪れ参加するプログラムでは語学研修のみならず、他国の生徒とコミュニケーションを図ることができる。また、1年生全員が参加する大阪大学・立命館大学の留学生との交流会では、自らが行った課題	生 - -
		N項目(はぐくみたい力) ・違いを認め共に生きる力 ・共感力 ・協調性 ・紛争を解決する力	⑤協調性・健康体力をはぐくむ	スキー、スノーボード講 (3泊4日)の実施	^{図会} 講習参加者数	109名	120名	120名	12月24日~27日の3泊4日、長野県志賀高原横手山スキー場に、生徒 120名、付添教員6名で実施。	仲間と集団行動ができた と回答した参加生徒の割 合	100%	100%	100%	スキー・スノーボードの体験を通じ大自然を満喫するとともに、集団生活を通じ、個人と集団の関係・時間やその他のルールを守る意義などを徹底して体験させることができた。また、レクレーションては、生徒たちで計画し、行動した点において大いに収穫がり、生徒たちにとって満足のいく取組みになった。	研究について発表するなどのアクティブラーニング的な手法を取り7 というでは、質的な充実に取り組んでいる。このような取組に参加することは、生徒にとって自らの英語会話力を記	\ \ \
	字校独自(・健康・体力・その他	⑥違いを認め共に 生きる力・紛争を 解決する力	①大阪大学留学生との交の実施(1年文理学科) 継続 ②立命館大学留学生との会の実施(1年普通科)	①参加者数	① 160人 ② 240名	① 1年生 文理学科 160人 ② 1年生 普通科 200名	① 1年生 文理学科 160人 ② 1年生 普通科 200名	①サイエンステーマ(SSH)及びグローバルテーマ(SGH)各5テーマを1年生文理学科4クラスの生徒たちが調べ学習を行い、その成果を阪大留学生49名に英語によるプレゼンテーションを行った。②1年生普通科の生徒が立命館大学いばらきキャンパスの留学生12名との交流会を行った。(英語コミュニケーションIの授業と関連付け、日本文化について調べ学習を行い、その成果をを英語で紹介するグループプレゼンテーションを実施。交流会の前半は留学生に自国の文化や将来の夢について語ってもらい、後半は紹介したい日本文化を英語でプレゼンテーションし、留学生の質疑応答に応える。留学生の学問の取組みや将来の夢を聞いた)	異文化について理解を深 めることができたと回答 した参加生徒の割合	100%	100%	100%	①大阪大学の教養及び探究心・冒険心の高い留学生と、実際に英語をつかって交流できたことが生徒の高い満足度を生んでいると考えられる。 ②普通科にも留学生との交流の機会を拡げ、1年生全員に対して留学生との交流を実施することができた。	すことができるほか、英語によるコミュニケーション力を付けたり、写文化理解を深めることができ、とても有意義である。スキー、スノーボード講習会への参加者も増えており、豊中高校の取組として定着している。いずれも、参加したすべての生徒が肯定的な回答していることは評価に値する。	回 異 で 参 組 参
	実	. 高い志をはぐくみ、進路 現をめざす い項目(はぐくみたいカ)	⑦高い志をはぐく む・規範意識	継続 地域交流活動、ボランテ 活動の推進	イア 活動人数	1079人	1160人	1110人	2年生全員が、クラブ単位や個人等で半日以上の異世代交流やボランティア活動に、自主的に取り組む「志学」(成果・ふりかえりのレポート提出)を実施。生物研究部や電気物理研究部の地域交流なども含む。 全学年のクラブ員で取り組む計画や、取組みを複数回計画するクラブもあった。	ボランティア活動に参加 した生徒の割合	100%	100%	100%	2学年全員が自主的に地域でのボランティア活動や異世代交流を行う「志学」が、本校における教育のひとつの柱として完全に定着し、生徒もその取組のなかで主体的に社会貢献意欲を高めている。地域からも認められる B 活動になり、「こころの再生」府民運動を推進した。また、豊中市のリーフレットに本校の取組がとりあげられた。	2年生全員がクラブ単位や個人で、ボランティア活動・異世代交流に取る。 継続 り組み、社会貢献意識を育んでいる。生徒が地域の活動に積極的に参加し、地元広報誌のパンフレットに	参
		N項目(はぐく <i>みにい刀)</i> ・規範意識 ・高い志 ・その他	⊗高い志をはぐく む	継続 土曜セミナー等の実施	SSS、SGSの合計実施 回数	380	400	420	①SSS(スーパーサイエンスセミナー) 24回実施 ②SGS(スーパーグローバルセミナー) 18回実施	授業以外の体験ができた と回答した参加生徒の割 合	100%	100%	100%	①SSS生32名 ②SGS生76名 B	掲載されるなど、地域に根差した町 再編 組を進めている。また、生徒の高い 志と学習意欲の向上をめざし、ステ	<u> </u>
知識基盤社会	li.		⑨高い志をはぐく む	継続 各界で活躍している方に	よる。講演会の回数	300	300	350	1月末まで ①1年全員 7回 進路別講演会(計15名招聘) ②2年全員 4回 ③3年全員 2回 ④1年課題研究基礎 4回 ⑤2年課題研究 2回 ⑥SSS 6回 ⑦SGS 6回 ⑧希望者対象講演会4回	目標を高くもって頑張ると回答した参加生徒の割合	97%	95%	97%	・参加生徒が、高い志を持ち、目標に向かって頑張ると回答する割合。 ・課題研究・課題研究基礎・SSS・SGSの事後アンケートで、自ら探究 活動を積極的に頑張りたいと回答した生徒の割合。	パーサイエンスセミナーやスーパーグローバルセミナー、各界で活躍する方による講演会などを数多く開催している。 いずれも、参加生徒のアンケート編集は非常に高く、評価できる。	す É
をリー	IV	7. 教員の指導力向上をめざ	⑩授業力向上	継続 保護者等への授業公開実	モ 保護者等の参加人数	549名	550人	474人	4月20日午後、10月28日午前に実施。 10月28日午前は台風による雨の影響で保護者参加数が少なかった。 C	参加した保護者の肯定的 な回答の割合	95%	95%	95%	授業内容を評価する保護者の感想・意見も増加している。 B	豊中高校はGLHSに加え、国から継続 SSH・SGHの指定を受けており、教員は前向きに取り組もうとする意	意
・ドする人材の育成		小項目(はぐくみたい力) ・授業力向上 ・教材開発 ・その他	⑪教科指導力向上	充実 外部講師による教科指導 上研修と教科会議	学校教育自己診断における 次の項目の肯定的評価9 0%以上 1.授業内容は自分の学習 や発達に役立っている。 2.教材や指導方法に工力が感じられる授業がある。 3.授業で自分の考えを記とめたり、発表する機会がある。	1. 85% 2. 91% 3. 88%	1~3の 項目の 肯定的評価 90% 以上	1. 83% 2. 93% 3. 89%	「生徒が希望する大学進学への受験指導」と「生徒が能動的に学ぶ学習・授業」の両方を充実させる「豊高型アクティブラーニング」の推進。 ①1学期校長による授業観察と指導・助言 4月下旬~5月上旬に実施②1学期、教員相互による授業見学の実施 6月12日~6月16日の5日間で実施。 ③10月5日 大阪教育大学教授による授業力向上研修(授業の「逆向き設計」)、授業力向上研修後の教科会議を10月26日に実施。 ④「学校教育自己診断(教員向け)」を10月19日に配布。10月末提出、11月中旬にデータを集約した結果。	経験の浅い教員のアン ケート結果で、生徒指導 力が向上したと回答した 割合	100%	100%	100%	経験の少ない教員が、管理職による2回の授業観察及び指導助言、教員相 互の授業見学、旧第1学区合同の授業力向上研修・研究協議の機会を通じ て、授業力及び生徒指導が向上したと回答。	識が見られる。 課題研究ではルーブリックを活用した評価を取り入れ、SGHの中間評価からも研究の質が向上しているでは明らかである。 また、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が求められる中、受験指導と生徒の主体的な学びの両方を充実させる「豊高型フ	AA
	[⑫課題研究力向上	充実 SSH・SGH課題研究におる評価法の確立	・心のルーブリック評値 ・豊高型グローバルマー ンドセット 評価のルーブリック	• SSH 3.7 • SGH 3.4	平均3.3以上	• SSH 3.3 • SGH 3.2	С	課題研究のルーブリック 評価で、課題研究の質が 高まったと回答する生徒 の割合	86%	85%	85%	В	クティブラーニング」推進に取り約 んでいる。 校長がうまく教員を巻き込みながら、チーム豊高として取組を進めていることは高く評価できる。	
	V	. 総合的な学力の測定	②10校が共通で実 施する学力調査							学力調査の結果		1年⇒2年	:-0.16 (A) 、2	2年⇒3年:0.00(A) *詳細は評価審議会資料3に明記	学力調査の結果において、学校として生徒の学力向上に取り組んでいる成果が見られる。	3
			②大学入試センター試験への参加							大学入試センター試験 5教科7科目受験者の割合	76%	80%	77.4%	大学入試センター試験 5教科7科目受験者の割合	継続 国公立大学を志望する生徒を最後る で頑張らせる指導が定着し、大学 が 試センター試験5教科7科目受験者	۸I AA
			③大学入試セン ター試験の結果							5教科7科目受験者にお ける得点率8割以上の者 の割合	21%	25%	25%	5教科7科目受験者における得点率8割以上の者の割合 B	の割合が増加している。その中で、 継続 得点率8割以上の生徒の割合が大き く増えたことは高く評価できる。	<u> </u>
	V	1. 課題研究活動	33課題研究活動							ルーブリック評価による 評価点	7.4点	平均8点 (10点満点)	7.4点	「心のルーブリック」(SSH)、「グローバルマインドセットのルーブ リック」(SGH)での平均点	継続 課題研究については、SGHの指定 により文系の教科にも広がり、全教科をあげ学校全体で指導している。	效
	共爲		⑩コンクール・コンテスト等の成果							全国規模のコンクール・コンテスト等の入賞者数	①全国レベル 13グループ ②世界レベル Oグループ	①全国レベル 5グループ ②世界レベル 1グループ	①全国レベル 6グループ ②世界レベル 1グループ	①SSH生徒研究発表会、JICA「国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2017」学校賞、SGH甲子園、2017年度SGH全国高校生フォーラム、ディベート全国大会 POI賞、日本物理学会ジュニアセッション 奨励賞 ②SISC 2017(Singapore International Science Challenge 2017) The Grand Champion Award 1名 The Best Engineering Product Award 1名 The Most Innovative Design Award 1名	はためり子校主体で指導している。また、学校が独自に作成した「心のルーブリック」などを活用し発表が容を評価することで、研究内容の質向上を図ることができている。その成果として、全国規模のコンクール・コンテスト等において、原果をあげていることは評価できる。	AA
	の取組	I. 英語運用能力	®TOEFLiBT (チャレンジを含 む)							TOEFLiBTスコア (チャレンジを含む)	1年生27名 iBT 40点以上2年生1名 iBT 60点以上 16名 iBT 40-60点	・1年生24人以上が iBT 40点以上・3年生8人以上が iBT 60点以上、 56人以上がiBT 40-59点	iBT 40点以上 12	名 TOEFLiBTチャレンジテストの結果 機器の不具合により、スピーキングスコアが測定された生徒は1年生で80名中31名。 同様にスピーキングスコアが測定された生徒は3年生で80名中40名	TOEFLiBTチャレンジテストの結果については、機器の不具合などもあり、目標には達しなかったが、GTECでは昨年度と同様の実績を残している。SETの配置による英語技業の改革をはじめ、即興型ディベート講習やリスニング講習などによ	あ 選 受 -
			②TOEFLIBT以外の 英語外部検定試験							GTEC For Student スコア(1,2年)	610点以上50名	610点以上50名	50名	GTEC For Studentの結果 B	り、生徒の英語運用能力は向上して 継続 いるものと考えられる。	
	VII	I. 進学実績	®スーパーグローバル大学(タイプAトップ型)13校への進学							スーパーグローバル大学 (タイプAトップ型)1 3校への進学者数(1浪 含む)	51名	60名	57名	A	継続 当初に設定した目標が高く、その目標に達していないものもあるが、すべての指標において、前年度実績を	す
			②進学実績							進路希望達成率 (年度当初の希望の達成 率)	50%	53%	51%	В	上回る結果となった。特に、スー	
			30国公立大学への 進学							国公立大学現役進学者数	102名	145名	127名	В		±
			③海外大学への進 学							海外大学進学者数(1 浪含む)	0名	2名	0名	С	継続というられるのでは、	
		総合評価		豊中高校は平成23年度	ーー に府のGLHSの	<u></u> 指定を受け、	グローバル		ーーー なに向けた取組を進め、進学実績などにおいて	大きな成果をあげ	ー げている。ま	 た、平成22 ***	年度に国か	ら指定を受けたSSHに加え、平成27年度にはSG もと、チーム豊高として授業改善に取り組むほか	SHの w 理 AA	

総合評価

豊中高校は平成23年度に府のGLHSの指定を受け、グローバル人材の育成に向けた取組を進め、進学実績などにおいて大きな成果をあげている。また、平成22年度に国から指定を受けたSSHに加え、平成27年度にはSGHの 指定を受け、課題研究の充実などに取り組んできた。昨年度末に発表されたSGHの中間評価では3年間の取組について高い評価を受けたところである。校長のマネジメントのもと、チーム豊高として授業改善に取り組むほか、課 題研究、学校行事・部活動や地域でのボランティア活動などの充実にも取り組んでおり、さらなる成果の拡大が期待されるところである。引き続き、学校全体としてグローバルに活躍できる人材の育成に努めてもらいたい。

ДД

平成29年度グローバルリーダーズハイスクール(GLHS)評価シート 府立茨木高等学校

 自己評価の基準
 A・・・計画以上
 A・・・高い成果をあげている

 自己評価の基準
 A・・・高い成果をあげている

 AAA・・・高い成果をあげている
 A ・・・成果をあげている

 B・・・取り組んでいるが工夫改善の余地がある
 B ・・・取り組んでいるが工夫改善の余地がある

 C ・・・取組の見直しが必要である

資料2-9

事業目的	大項目	小項目	今年度の 取組方針	取組	取組指標	前年度実績	目標値	実績	実績の詳細	自己評価	成果指標	前年度実績	目標値	実績	実績の詳細	自己評価	次年度の 取組方針	評価審議会の評価 コメント	評価
	I. 確かな学力の向上を図る 	①言語活用力	継続	ディベートを取り入れた英語授業の実施	実施回数	7回 /講座	6回 /講座	6回 /講座	目標を達成	В	【アンケートによる生徒の評価】 ディベートをすることで英語の表現力 が高まった	82%	75%	85%	目標達成	А	水圧形じ	保健の授業でのプレゼンテーション やディベート、英語の授業でのディ ベートは長年継続しており、生徒の 表現力の育成の点で成果をあげてい	
	小項目(はぐくみたいカ) ・言語活用カ ・にT活用カ ・読解カリテラシー ・科学的リテラシー ・英語運用能力	②言語活用力・ICT活用力	継続	教科・委員会活動を通じたプレゼンテー ション能力の向上	A:「保健」の授業での プレゼンテーション B:「1年行事委員会活動」での 生徒間のプレゼンテーション	A:1回以上 /生徒 , B:20回	A:1回 /生徒 B:10回	A:1回 /生徒 B:11回	A:1年保健では環境汚染についての プレゼンテーション、2年保健では生 涯を通じる健康の分野でディベートを 実施。 B:委員会活動は現時点で11回実施。	В	【アンケートによる生徒の評価】 A:授業を通じて自らの成長を実感できた B:1年行事委員会に参加して充実した活動ができた	A:90 B:90	90%		A:目標達成 B:目標達成	В	継続	る。 基礎学力の充実をめざし設定した図書の充実にかかる指標では概ね目標を達成することができた。蔵書を充実させるとともに、図書委員による	А
	・その他	③基礎学力の向上	新規	進路目標達成のための基礎的教養や知識 を高める図書の充実	図書館の開館日数の確保	211日	210日		目標に近い値を達成	В	生徒に対する図書館蔵書の貸し出し冊 数及び、生徒一人あたりの図書購入冊 数	貸出冊数 2977冊 購入一人年 2.1冊	貸出冊数 3000冊 購入一人年 2冊	貸出冊数 3331冊 購入一人年 2.2冊	目標達成	В	継続	図書紹介など、生徒が図書館に立ち 寄りたくなる雰囲気づくりがなされ ていた。今後もさらなる充実を図り ながら、継続して取り組んでもらい たい。	
	Ⅱ. 豊かな感性と、たくまし く生きるための健康と体力を よぐくむ	④共感力・違いを認め共に 生きる力	継続	生徒の人権委員を中心とした多文化共 生・多様性受容の取り組み	実施回数	10回/3年 7回/2年 7回/1年	年4回/学年	11回/2年	3年:大阪の在日外国人問題 2年:戦争と人権 1年:命について考える	В	【アンケートによる生徒の評価】 様々な取り組みを通じて、深く自国や 自分自身を見つめ直すことができた	3年97% 2年99% 1年96%	90%	3年98% 2年92% 1年84%	平均91%、目標を達成	В	継続	生徒議会が中心となり企画・運営する宿泊野外行事や学校祭などの学校 行事は、生徒の自主性を重んじる茨 木高校の大きな特長となっている。	
	小項目(はぐくみたい力)・違いを認め共に生きる力・共感力・協調性・紛争を解決する力	⑤課題発見力・紛争解決力	継続	生徒各種委員会の定例開催と討議内容の	開催回数	250	200	250	生徒議会12回 学校祭関係委員会13回	В	【アンケートによる生徒の評価】 「文化祭」「体育祭」等の学校行事は 充実した内容で実施され、工夫さてい る	90%	90%	91%	目標達成	В	継続	また、リーダーになるということを 様々な側面から生徒に伝えており、 生徒もそのことを意識しながら、将 来のことを考えている点は評価でき る。	AA
学校独自6	・ 約 手 を 解 沃 9 る 力 ・ 健康・ 体力 ・ そ の 他	⑥健康・体力をはぐくむ	継続	リーダー研修皿(クラブサポート事業) の実施	実施回数	120	100	120	のべ903名	В	【アンケートによる生徒の評価】 研修内容を、今後のクラブ活動におい て有効活用できる	90%	90%	90%	目標達成	В		それらの取組がグローバル人材に求められる主体性、協調性、責任感・ 使命感などの育成に大きく貢献していると言える。	
	Ⅲ. 高い志をはぐくみ、進路 実現をめざす	⑦高い志・規範意識をはぐ くむ	継続	リーダー研修 I・Ⅱ(リーダーの資質と 規範意識の獲得)の実施	実施回数	I:150 I:90			I:のベ794名 I:のベ349名	В	【アンケートによる生徒の評価】 研修内容を、今後の学校生活において 有効活用できる	I:92% I:90%	90%	I:92% I:90%	目標達成	В	継続	多くの刺激を与え、生徒に学びの意味と自らの将来について深く考えさせる機会とするため、卒業生講座以外の講演などにも「先輩の背中を追	
	小項目(はぐくみたい力) ・規範意識 ・高い志 ・その他	⑧高い志・共生力をはぐく む	継続	ボランティア活動の推進	地域等の活動への参加回数	130	100	150	地域清掃、障がい者施設訪問、世界の 飢餓の子どもを支援する活動、防災活 動補助ボランティア等	В	生徒ののべ参加人数	790名	780名		地域清掃活動570名、地域行事補助等 130名(祭り等)、世界飢餓子ども 支援40名、防災ボランティア50名	В	継続	う」ことを重視し、各界で活躍する 卒業生を招聘している。生徒にとっ ては将来像を描き進路を考える上で の良き目標となっている。 また、地域等でのボランティア活動	А
知識		⑨学びの意味と自らの将来 について深く考える	再編	卒業生講座•学問発見講座	実施講座数•実施回数	計23講座 /年2回	15講座 /年2回 (15講 座)		学問発見講座14講座 卒業生講座10講座	В	【アンケートによる生徒の評価】 「卒業生講座・学問発見講座」は、自 分にとって満足できる内容であった	94%	90%	94%	学問発見講座の満足度(94%) 卒業生講座の満足度(94%)	В	継続	への参加回数も増えており、多くの 生徒が高い志や共生力を育んでいる ことは評価に値する。	
基盤社会	W. 教員の指導力向上をめざ す 「小項目(はぐくみたいカ)」	⑩最先端の学びの研究	充実	大学等と連携した「最先端の学び」を知る取り組み	実施教科数	2教科	2教科	4教科	GLHS教員研修受講 (国語・数学・物理・英語)	В	《授業アンケートによる生徒の評価》 この先生の授業を受けて、科目に対す る興味・関心が一層深まった	82%	85%	83%	目標に近い値を達成	В		早くから取り組んできたバディシステムを用いた互見授業は定着し、広がりを見せながら継続している。また、生徒による授業アンケート結果	
をリードす	・授業力向上・教材開発・その他	⑪授業力向上	継続	バディシステムを用いた互見授業の実施	教員1人あたり年2回以上の実施	2.7回/人	2.0回/人	2.8回/人	目標を達成	В	《授業アンケートによる生徒の評価》 信頼できる先生なので来年もこの先生 の授業を受けたい(後輩に受けさせた い)	86%	85%	88%	目標を達成	В		を、校長が教員に対する指導助言に使うなど、うまく活用している。 学校が独自に行う生徒への授業アンケートにおいて高い評価を得ていることは、学校として早くから組織的	А
る人材		⑪授業力向上	充実	研究授業の実施	実施回数	90	90	90	全教科で実施済み	В	研究授業の教員のべ参加人数	92名	60名	90名	目標を達成	А	継続	な授業改善に取り組んできた成果で ある。そして、こうした取組は他校 にも広がっており、評価に値する。	
の育成		⑬10校が共通で実施する学 力調査									学力調査の結果	1年⇒2年	E:-0.99 (E	3)、2年⇒3	3年:-0.22(A) *詳細は評価審議会	資料 3	に明記	学力調査の結果において、特に1年 から2年でマイナスが大きいことに	
	V.総合的な学力の測定	(4)大学入試センター試験への参加									大学入試センター試験 5教科7科目受験者の割合	84.5%	85%	82.3%	目標に近い値を達成	В	継続	ついて、分析のうえ、改善策を検討してもらいたい。 大学入試センター試験5教科7科目 受験者の割合は維持しているが、5 教科7科の得点率がやや下がってし	AA
		(15大学入試センター試験の 結果									大学入試センター試験の5教科7科目の受験者の得点率	75.6%	74%	74.1%	目標を達成	В	継続	まった。ただ、依然として、高い水 準は維持していると言える。	
		⑩課題研究活動									多様なテーマを扱う生徒の課題研究	14講座	14講座	24講座	2年生全学年で実施(普通科を含む)	А	絲絲売	来年度以降のオール文理を見据え、 先行して普通科にも課題研究を取り 入れ、探究的な学びを学校全体に広 げた。10校で唯一、SSHやSGH	
共通の	VI. 課題研究活動	⑪コンクール・コンテスト 等の成果									全国青少年読書感想文コンクール・全 英連 全国 essay contest等の入賞者 数	8名	2名	047	全国高等学校英作文コンテスト入選2名 大阪府読書感想文コンクール優秀1名 大阪・京都数学コンテスト奨励賞1名 GLHS合同発表会大阪大学賞5名	А	継続	の指定を受けていないが、卒業生の協力を得ながら、文系・理系を問わず、多様なテーマを扱った高度な課題研究を実施できる体制を構築していることは評価に値する。	В
取組	Ⅷ. 英語運用能力	⑱TOEFLiBT(チャレンジ を含む)									TOEFL iBT コンプリートプラクティステストスコア ①80点以上の人数 ②60点~79点の人数	①5名 ②16名	①4名 ②20名	①4名 ②10名	①は目標を達成 ②は目標に達せず	В	継続	TOEFL iBTを取り入れた授業を受講する生徒が多く、英語科全体として取り組み、その指導体制が充実している。	AA
	, VIII (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1)	⑨TOEFLiBT(チャレンジを含む)以外の英語外部検 定試験									TOEFLiBTスコア(チャレンジを含む)以外の英語外部検定試験							目標には達していないが、60点以上の生徒が14名いることは高く評価できる。今後もさらなる指導の充実に取り組んでもらいたい。	
		②スーパーグローバル大学 (タイプAトップ型)への 進学									スーパーグローバル大学(タイプA トップ型)13校への進学者数(1浪 含む)	94名	80名	92名	目標を達成	В		難関国立大学等への進学者数、国公 立大学現役進学者数ともに昨年度の	
	瓜. 進学実績	②進学実績									東大、京大、阪大、神大の合格者数	120名	120名	103名	目標に近い値を達成	В	か匹かり	実績を下回る結果となった。 今回の結果を分析し、次年度以降の 教科指導や進路指導に活かすこと	В
		②国公立大学への進学									国公立大学現役進学者数	126名	_	119名				で、これらの指標の実績が伸びることを期待する。	
Щ		③海外大学への進学	I								海外大学進学者数(1 浪含む)	O名	_	O名					

総合評価

茨木高校では、生徒が運営する宿泊野外行事(海外修学旅行)や夜間登山などの学校行事で自主自律の精神を、卒業生講座や学問発見講座では本物に触れ、先輩の背中を追いかけることで高い 志を、また、部活動・学校行事を通したリーダー養成プログラムでリーダーとなる資質を育んでいる。このように、「高い志を持ち、それを持続させる力を付けること」「『二兎を追う』たくましさを身に付けること」「自主自律の精神を養うこと」を目標として、高校生活の中に様々な活動を散りばめている点はすばらしい。また、早くからバディシステムなどを取り入れ、組織的な授業改善に取り組み、成果をあげていることは高く評価できる。今後もこうした取組を継続・発展させ、豊かな感性と幅広い教養を身に付けた、社会に貢献する志を持つグローバルリーダーの育成に努めてもらいたい。

А

府立大手前高等学校

 A・・・計画以上
 A・・・計画以上
 評価審議会
 A・・・高い成果をあげている

 自己評価の基準
 B・・・おおむね計画通り
 評価の基準
 A・・・成果をあげている

 C・・・計画以下
 評価の基準
 B・・・・取り組んでいるが工夫改善の余均

AA ・・・高い成果をあげている A ・・・成果をあげている B ・・・取り組んでいるが工夫改善の余地がある C ・・・取組の見直しが必要である

資料2-1

事業目的	大項目	小項目	今年度の 取組方針	取組	取組指標	前年度実績	目標値	実績	実績の詳細	自己評価	成果指標	前年度実績	目標値	実績	実績の詳細	自己 次年 評価 取締	E度の 評価審議会の評価 B方針 コメント	評価
	I. 確かな学力の向上を図る 小項目(はぐくみだい力) ・言語活用力	①言語活用力・ICT活用力	充実	校内成果発表会の実施	校内成果発表会の発表人数	719人	720人	845人	(文理学科1年まこと発表160人) 文理学科2年のぞみ発表160人 文理学科S探発表160人中間発表160 人 SSH全国1人 サイエンスデイ4人 情報の科学普通科200名	٨	①プレゼンテーション能力が向上したと回答した発表生徒の割合 ②外部指導助言者等による肯定的評価割合	①95.0% ②81.8%	①100% ②指導助言 者の好評価 82%	①96% ②91%	①SSH主対象者アンケートをもとに ②サイエンス探究最終発表会助言者アンケートによる(11名中10名が好評価)	A Á	校内成果発表会については、発表人数が増え、アンケート結果でも高い評価を得ている。また、勉強合宿や補習・講習への参加者数も増えており、これらの取組については評価に	
	・ICT活用力 ・読解カリテラシー ・科学的リテラシー ・英語運用能力 ・その他	②基礎学力の向上	継続	勉強合宿・補習・講習の実施	参加者数	のべ1077 人	のべ1000 人	1197人	勉強合宿1年 1 1 9 人 3 月実施 勉強合宿2年 9 7 人 3 月実施 補習・講習1年 354人 学活 補習・講習2年 267人 学活 補習・講習3年 360人 講習		5教科7科目受験者における得点率 8割以上の者の割合	27.3%	28%	26.0%	本校生徒の自己採点回収分の5教科7 科目受験者数312名中81名	В 3	値する。 ただ、イングリッシュキャンプ・ TOEFL講座については、TOEFL講座の参加人数が減るとともに、英語 運用能力に自信がついたと回答した。	В
		③英語運用能力	充実	①イングリッシュキャンプ・TOEFL講座の実施 ②ネイティブによる4技能向上に向けた授業実践	参加者数	①110人 ②720人	①160人 ②720人	①60人 ②720人	①Focus TOEFL 60名 ②3名のネイティブスピーカーによる 実践	А	①英語運用能力に自信がついたと回答した参加生徒の割合 ②センター試験英語平均点	①99% ②全国平均 に対して 133%	①100 ②全国平均 に対して 134%	①82% ②全国平均 に対して 124%	①オンラインテストのスコアが伸びた 生徒の比率 両方受けた56人中46人 ②センター自己採点集計英語筆記で比 較	В 3	参加生徒の割合が大きく後退していることから、その結果を受け止め、 次年度の取組の改善に努めてもらいたい。	1
	Ⅱ.豊かな感性と、たくましく生きるための健康と体力をはぐくむ	④違いを認め共に生きる力・紛 争を解決する力	継続	海外からの学校訪問の受入海外スタディツアーの実施	・学校訪問受入者数 ・海外スタディツアー参加者数	受入34 派遣93 交流98	200人	受入21 派遣112 交流59	英国派遣 10名 ケンブリッジ研修 9名 オーストラリア研修 30名 シンガポール研修 63名 米国高校生の受入・交流	В	異文化について理解を深めることが できたと回答した参加生徒の割合	95%	100%	95%	生徒アンケートによる	A A	海外スタディツアーについては内容を精査しながら充実を図っており、アンケートにおいて高い肯定回答率を得ている。 大手前高校の伝統的行事である全校	
	小項目(はぐくみたい力) ・違いを認め共に生きる力 ・ 共感力	⑤共感力・協調性	継続	①野外生活体験学習の実施 ②コーラス大会の実施	参加者数	①360人 ②1080人	①360人 ②全校生徒	①360人 ②1080人	1年生の校外教授 コーラス大会	Α	この学校で良かったと回答した生徒 の割合	98%	96.0%	97%	卒業時のアンケートによる	A A	大手前高校の伝統的打事である主校 生徒が参加するコーラス大会をはじ めとした学校行事、高い加入率を誇 る部活動は生徒の満足度が高い。ま	Á
 学校 独自	・協調性 ・紛争を解決する力 ・健康・体力	⑥健康・体力をはぐくむ	継続	クラブ活動や学校行事のための自治会活動の活性化	①新入生オリエンテーションや 部活発表会の実施 ②自治会発行冊子の発行	①年間2回 ②年間一部	①年間2回 ②年間一部	①年間2回 ②年間一部	①新入生がエンテーションでのクラブ紹介・文科系クラブ発表会・文化祭 ②自治会冊子『スプリング』年1回スプリング・『自治会伝心版』3回発行	А	クラブ加入率	91.8%	92.0%	93.6%	部活動基本調査のデータによる	A Á	た、これまでの伝統を受け継いでいる自治会活動は今も活発に取り組んでいる。これらの良き伝統は今後も継承してもらいたい。	
の 取 組	Ⅲ. 高い志をはぐくみ、進路 実現をめざす	⑦社会貢献意識を高める	充実	ボランティア活動の推進	ボランティア活動に参加する人 数	537人	540人	570	大阪マラソンボランティア78人 子ども水泳教室33人 ECO縁日17人・ジオカーニバル9人・リレー フォーライフ25人・清掃ボランティア114人・ 大阪城英語案内16 他	Α	GLHS卒業生アンケート「学びの成果を将来社会の役に立てたい」とする項目の肯定的意見の割合	75.0%	76.0%	73%	GLHS卒業生アンケートによる	B á	大阪マラソンボランティアや大阪城 観光客への英語サポートを部活動単 位で行うなど、社会貢献意識の涵養 をめざしボランティア活動の拡大に 取り組み、参加者数も年々増えてい	
	小項目(はぐくみたい力) ・規範意識 ・高い志 ・その他	⑧規範意識	継続	自己規律意識の涵養	全教員の輪番による登校指導	毎日	毎日	毎日	生徒登校日はすべて実施	Α	1年あたりの総遅刻者数	2411人	2500人		本校生徒指導部集計による(12月 末) 昨年同時期1742	B ŧ	る。 各界リーダーによる講演会は毎年回数を増やし充実させており、目標を高くもって頑張ると回答した生徒の割合が高いことは評価できる。1年	AA
知		⑨高い志をはぐくむ	充実	各界リーダーによる講演会の実施	OB等による講演会の回数	104回	1000	1170	京大研修9回 (理系5文系2卒業生2) 阪大研修3回・東京研修14回 集中セミナー75回 進路講演14回 (卒業生/外部) 京大講演・のぞみ講演	Α	目標を高くもって頑張ると回答した 参加生徒の割合	97.0%	97.0%	97%	行事実施後の生徒アンケートによる	A A	あたりの総遅刻者数が大きく増えているため、生徒一人ひとりの状況を踏まえ、その原因を分析することが求められる。	
識基盤社会を	Ⅳ. 教員の指導力向上をめざ す	⑩進路指導力向上	継続	民間教育産業と共同したスキルアップ研修	①研修回数 ②研修参加者数	①31回	①30回 ②70人	①19回 ②80人 (のべ)	進路研修1回 模試分析会(校内)7回 予備校主催の大学入試研究会5回 センターリサーチの分析会2回 予備校での浪人生報告・激励会4回	А	本校の進路指導は信頼できると回答 した保護者の割合	90.2%	90.0%	92%	学校教育自己診断の進路指導の項目であてはまる・ややあてはまると答えた割合	A	新たに1対1のペアをつくり互見授業を行うバディシステムを導入した。今年は最低年1回としたようだが、教科を超えたネットワークづくりにも役立つであろう。来年度はうまく機能し成果をあげられるよう、	•
リードする	小項目(はぐくみたい力) ・授業力向上 ・教材開発	⑪授業指導力向上	充実	研究授業、授業参観等の実施 (バディシステムの導入)	①研究授業の回数 ②公開授業の回数	1700 21350	①67回 ②134回	12750 22160	授業公開(午後2限×4日間)216回 校長による授業観察70回 指導教諭による授業観察180回 バディによる授業見学25回	Α	生徒アンケート「次年度も授業を受けたい、または後輩に進めたい」と 回答した生徒の割合	84.0%	84.0%	86.70%	授業アンケートによる(後期)	A A	システムの改善に努めてもらいたい。 い。 外部教育機関を活用した研修や、首席が中心となって行う校内研修、オリジナル教材の開発やシラバスの充	AA
る人材の育	・その他	⑫教材開発	継続	①オリジナル教材の開発 ②シラバスの充実	①教材開発 ②改定冊数	①7科目 ②3学年分	①7科目 ②3学年分	①8科目 ②3学年分	①英数国・地理・物化生地 ②新たな評価の観点を盛り込み改定	Α	先生は教科書の他、役に立つプリントなどをうまく使っていると回答した生徒の割合	83.9%	84.0%	85.70%	授業アンケートによる(後期)	A	実など教科内の取組も進んでおり、 それらの取組が生徒による授業アンケートの伸びにつながっていると考えられる。	,
成		⑬10校が共通で実施する学力 調査									学力調査の結果	1年⇒2年	F:-0.78 (E	3)、2年⇒3	3年:-0.47(A) *詳細は評価審議:	会資料3に	学力調査の結果において、特に1年 から2年でマイナスが大きいことに ついて、分析のうえ、改善策を検討	
	V. 総合的な学力の測定	(4)大学入試センター試験への参加									大学入試センター試験 5教科7科目受験者の割合	86.0%	88%	86.0%	卒業予定者360名に対する比率	В	してもらいたい。 大学入試センター試験5教科7科目 受験者の割合は維持しているが、得 点率8割以上の生徒の割合が、昨年	AA
		⑤大学入試センター試験の結果									5教科7科目受験者における得点率 8割以上の者の割合	27.0%	27.5%	26%	本校自己採点結果による	В	度実績をやや下回った。このことについて当該の教科で分析を行い、今後の改善に繋げてもらいたい。	;
		16課題研究活動									全国規模での大会の発表者数	11人	12人	24人	連数教5人 関学サイエンスフォーラム6人 阪大SEEDS1人 京大ELCAS1人 SSH全国大会発表1人 マスフェスタ発表者10人	A Á	送続 SSHの取組を核として、課題研究 の質向上と校外での発表者数拡大に 取り組んでいる。	
共通	VI. 課題研究活動	⑪コンクール・コンテスト等の 成果									全国規模のコンクール・コンテスト 等の入賞者数	6名	6名 ②全国レベ	①府レベル 14名 ②全国レベ ル15名	大阪サイエンスデイ銀賞3名 大阪学生科学賞入賞1組5名 科学の甲子園7位7名 パソコン甲子園5位2名 グローバルサイエンスキャンパス発表会2位 生物オリンピック入賞2名 日本数学コンクール入賞1名 他	A	全国規模の大会での発表者数、コンクール・コンテスト等の入賞者数ともに昨年度実績を大きく上回ったことは高く評価できる。	AA
即組	Ⅷ. 英語運用能力	⑱TOEFLiBT(チャレンジを含む)									TOEFLiBTスコア(チャレンジを 含む) ①1年次 60点以上 ②2年次 60点以上	①4人 ②今年度よ り	①4人 ②16人	①5人 ②10人	TOEFLチャレンジ、IBT受験による	ВЗ	TOEFL iBTチャレンジの結果において、目標を上回ったことは評価できる。ただ、上にも書いたが、土曜日に行うTOEFL講座の人数が減っ	AA
		⑨TOEFLiBT(チャレンジを含む)以外の英語外部検定試験									センター試験英語平均点	全国平均に 対して 133%	全国平均に 対して 134%	全国平均に 対して 124%	センター自己採点集計による	ВЗ	たこと、アンケートの結果が低く なったことについて課題を洗い出 し、次年度の取組の改善に繋げても らいたい。	
		⑩スーパーグローバル大学(タ イプAトップ型)13校への進 学									スーパーグローバル大学(タイプA トップ型)13校への進学者数(1 浪含む)	74人	80人	89人	本校進路指導部集計による	A Á	入学時の進路希望を元にした達成率を指標にすることは、真の進路希望実現に向けた取組として意義があり、今後も継続してもらいたい。	
	哑. 進学実績	②進学実績									進路希望達成率 (第一志望への合格率)	34.4%	38.0%	34.6%	本校進路指導部集計による	A A	国公立大学現役進学者数は昨年度実 議を下回ったが、スーパーグローバ ル大学13校への進学者数は大きく 増加しており、その点は評価でき	AA
		②国公立大学への進学									国公立大学現役進学者数	161人	140人	145人	本校進路指導部集計による	A	は加しており、その点は評価できる。 る。 今年度の結果を分析し、今後の教科 指導や進路指導に活かすことによ	ļ
		②海外大学への進学									海外大学進学者数(1 浪含む)	O人	2人	0人	本校進路指導部集計による	B	り、次年度の実績向上につなげても らいたい。	5

総合評価

大手前高校は高等女学校を前身とするスマートなイメージの学校である。GLHSとしての使命を踏まえつつ、めざすべき学校像を明確に示し、心と体を鍛える充実した部活動や伝統ある学校行事をはじめ、思考力・判断力・表現力等を育むSSHを核とした課題研究の取組、英語4技能の向上をめざしたTOEFLを取り入れた英語教育、異文化理解と交流を進めるイギリス・オーストラリア・シンガポールでの海外研修、高い志を育む京都大学や大阪大学などとの高大接続などに取り組んでいる。また、今年度新たにバディシステムを導入し、授業改善と組織力強化に取り組んでおり、今後の成果に期待するところである。今後も、これらの取組をさらに充実させながら、これからの国際社会に貢献するグローバル人材の育成に努めてもらいたい。

AA

府立四條畷高等学校

 自己評価の基準
 A・・・計画以上
 A・・・計画以上
 A・・・高い成果をあげている

 自己評価の基準
 C・・・計画以下
 AAA ・・・高い成果をあげている

 AA ・・・高い成果をあげている
 A ・・・成果をあげている

 B ・・・取り組んでいるが工夫改善の余地がある
 C ・・・取組の見直しが必要である

資料2-10

事業目的	大項目	小項目	今年度 <i>0</i> 取組方針	取組	取組指標	前年度実績	目標値	実績	実績の詳細	自己評価	成果指標	前年度実績	目標値	実績	実績の詳細	自己 次評価 耶	次年度の 取組方針	評価審議会の評価 コメント	評価
	I. 確かな学力の向上を図る	・自学自習力 ・言語活用力	継続	学習合宿と英語コミュニケーション集中講座 の実施	自学の取組みにおける生徒の自己 評価 (学習合宿)	68%	80%以上	88%	自学への取組は88%の生徒が高評価。取組みの工夫により、学習合宿や英語コミュニケーション講座への満足度はいずれも93%と評価が上昇した。	А	英語コミュニケーション集中講座 の取組についての生徒の評価(肯 定的意見)	96%	90%以上	93%	ネイティブの講師による集中講座への生徒の満足度は93%であり、英語のコミュニケーションカ向上には88%の生徒が意欲が高まったと回答。	В	再編	昨年度から開設した「探究ラボ」では、 ゼミ形式での探究活動のほか、大学・研 究施設での課外研修活動、校内外での研 究発表などを行っており、参加生徒の満 足度がとても高く、評価に値する。今後	
	小項目(はぐくみだい力)	ICT活用力コミュニケーションカ表現力	充実	プレゼンテーション大会の系統的実施	参加人数	360名	720名	720名	「情報社会の問題」をテーマに、クラス予選を 経てクラス対抗のプレゼン大会を実施。同様の 形態の英語スピーチコンテストも実施。英語の 授業では、課題研究の成果の英語ミニプレゼン も行った。	А	各種プレゼン大会に向けての取組 に対する生徒の評価(肯定的意見)	90%	90%以上	90%	課題研究発表におけるプレゼンカ向上を目標に、情報や英語をはじめ授業でプレゼン形式の発表に多く取組み、集大成の場として、情報・英語・課題研究の計3回大会を実施した。表現力は着実に向上している。	В	継続	も、課題研究の充実に向け、さらなる工 夫に期待したい。 自学自習力を付けるため、1年生を対象 に行っている学習合宿については今年度 生徒の満足度が大きく伸びた。また、英	А
		・科学的リテラシー	新規	「探究ラボ」による科学的リテラシー育成	取組メニューの数	新規	10個	13個	「探究ラボ」で基礎実験、討論やプレゼン、探究活動、校外発表、ELCAS等への参加(9名)、各種コンテストへの参加など行い、大阪サイエンスデイでは金1・銀1受賞。	А	「探究ラボ」の生徒による活動へ の評価(肯定的意見)	新規	90%以上	91%	「探求ラボ」の生徒による満足度は91%であり、「科学技術に対する興味・関心が高まった」の肯定率は92%であった。積極的に活動を続けており、成長が期待される。	В	継続	語コミュニケーション集中講座やプレゼン大会についても、生徒による評価が高く、英語運用能力やコミュニケーションカの育成に有意義な取組であると言える。	
	II. 豊かな感性と、たくましく 生きるための健康と体力をはぐ くむ		充実	海外修学旅行及び海外からの訪問者受入による国際交流	修学旅行全般についての生徒の評 価(肯定的意見)	95%	90%以上	93%	修学旅行(10月)は2年生全員が台湾に行き、 大学生と交流。台湾の高校(2月)の本校訪問では、歓迎会、授業・部活交流などを実施。ドイツの高校(3月)の本校訪問に備え準備中。	В	国際交流に対する生徒の評価(肯定的意見)	68%	70%以上	88%	修学旅行や国際交流キャンプ、各種海外研修、 台湾とドイツの高校による本校訪問など、国際 交流に対する生徒の満足度は、昨年度よりも 20%上昇した。	А	継続	台湾修学旅行や国際交流キャンプ、海外研修など、国際交流に対する生徒の満足度が、昨年度と比べ20%上昇したことは評価できる。今回、数値が大により	
<u> </u>	小項目(はぐくみたい力)	違いを認め共に生きる力共感力協調性	充実	海外研修(オーストラリア・ベトナム)及び 国際交流プログラムの充実(1・2年希望 者)	参加人数	33名	70名以上	130名以上	AIU国際交流プログラム(5名)、ケンブリッジ研修(1名)参加。ベトナム研修(6名)、オーストラリア研修(20名)、国際交流キャンプ(29名)、ドイツホームステイ受入(16名)。台湾との交流(授業等53名、部活等多数)	А	海外研修参加生徒によるプログラ ムに対する評価(肯定的意見)	100%	90%以上	100%	国際交流キャンプ、ベトナム研修の肯定率はいずれも100%であった。特にベトナム研修は医療ボランティア活動での人と心が触れ合う経験により充実度は極めて高い。オーストラリア研修(3月)でも評価実施予定。	A	継続	した理由を分析し、今後の取組に活かしてもらいたい。海外研修及び国際交流プログラムに多くの生徒が参加したこと、また海外研修の肯定的意見が100%であったことは評価に値する。部活動入部率は高く、近畿大会へ出場するクラブも多くあり、優秀な成績をはあった。	Α
村 3 日 <i>日</i> 日 日		・協調性 ・健康・体力 ・リーダー育成	継続	充実した部活動の維持	部活動の参加率	92%	90%以上	93%	部活動の参加率は、1年生で96%、3学年合わせると93%となっている。	В	部活動による入賞件数	72件	60件以上	76件	76件入賞。近畿大会以上に、男子ソフトテニス、女子ソフトテニス、水泳、バドミントン、山岳、軽音、写真(全国)の7部8種目出場。	А	継続	ている。部活動や学校行事への取組は熱心であり、生徒の学校に対する評価や満足度がとても高いのが四條畷高校の魅力であり、大きな特長である。	
糸	Ⅲ. 高い志をはぐくみ、進路実現をめざす 「小項目(はぐくみたいカ)	・進路実現 高い志	継続	飯盛セミナーの実施	講座数と参加人数	1 O講座 371名	5講座 380名	13講座 488名	1日目5講座・2日目8講座を実施。外務省大阪 分室長や四條畷市長など第一線で活躍している 講師を招くと共に、産業技術総合研究所等校外 実施も企画し充実を図った。		参加生徒によるプログラムに対す る評価(肯定的意見)	91%	80%以上	98%	担当を学年からGL部に移して取組みの充実を図った結果、生徒の評価が大きく上昇した。特に外務省、起業、研究施設訪問など実際に即したプログラムは高評価であった。	А	継続	「飯森セミナー」では2日間で13講座を設定し、これまで以上に多くの生徒が参加した。学年主導の企画ではなく、今年度から新たに組織したGL部が生徒のニーズを中心に考え、講座を決定したこ	
	・規範意識 ・高い志 ・その他	・進路実現 高い志	継続	大学研究室訪問(東大・京大・阪大・神大)	参加人数	340名	300名以上	392名	本校卒業生の研究室等を訪問し、大学での実際の学びを学習した。大学別参加数は、東大15名・京大171名・阪大126名・神戸大80名。	А	参加生徒によるプログラムに対す る評価(肯定的評価)	100%	80%以上	98%	各研究室で実際の研究に触れ、グループワーク など課題認識を深める取組みも実施いただいた 結果、生徒は大きな刺激をもらい将来像や自己 実現への意欲が高まった。		継続	とが大きな成果を生み出している。 卒業生の大学研究室訪問にも多くの生徒 が参加しており、将来を考え、自己実現 への意欲を高める機会となっている。ま た、地域清掃をはじめ、地域に根差した	А
知 識	·	・規範意識とリーダーの資質向上	新規	①登校指導の実施 ②アドプト・ロード・プログラム及び地域清 掃活動の取組み	①実施日数 ②のべ参加者数	新規	①160日 ②200名	①168日 ②754名	登校指導は常時10数名の教員が参加。アドプトロードや地域清掃には教員184名、生徒570名が参加。取組を継続的に行っている。	А	積極的に挨拶していることへの生 徒の自己評価(肯定率)	新規	80%以上	91%	1学期は、積極的な挨拶や自らコミュニケーションを図ることに消極的な生徒が目立ったが、2学期から急速に意欲向上が見られた。	A	継続	取組を進めていることは評価に値する。 これらの取組はいずれも高い評価を得て おり、有意義な取組となっていると言え る。	
基盤社会	Ⅳ. 教員の指導力向上をめざす	教員力の向上	再編	研修の系統的実施及びメンタリングによる教 員の相互育成	研修実施回数と参加人数	年6回 146名	年3回 150名以上	年4回 195名	スキルアップ研修57名、人権研修(SNSと人権61名)、教育改革(新制度入試36名、推薦書等の作成41名)など。	В	研修に対する教員の評価(肯定的 意見)	79%	80%以上	99%	研修の内容をニーズに即したものとし、評価の 高い講師を選定することにより、研修への評価 が高まった。	A	継続	教員の授業力向上をめざし、学校として アクティブ・ラーニングを取り入れた授 業を推進しており、英語科や国語やを中	
云をリー	小項目(はぐくみたい力) ・授業力向上	・初任者の指導力向上	継続	初任者の指導力向上のための取組み	初任者ミーティング実施回数	120	100	120	校長やミドルリーダーが講師となり、校内初任 研を実施。2年目・10年目の教員もメンター として適宜参加し意見交換を行っている。	А	初任者ミーティングに対するアン ケートや感想による教員の評価 (肯定的意見)	100%	90%以上	100%	初任者ミーティングにメンタリングの要素を入れており、昨年度より充実が図られている。	A	継続	心に広がってきているが、全体に広がる には時間を要しそうである。 2年めの教員がメンターとして、10年 めの教員がアドバイザーとして関わるな	В
ドする人材	・教材開発・その他・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 教科指導力向上 • 教材開発	再編	①研究授業び教員間の授業公開の実施 ②アクティブラーニングへの取組み	①実施回数 ②取組み教員数の割合	①10回 ②新規	①10回 ②80%	①17回 ②88%	研究授業は初任者10回・英語中高連携1回・ 数学指導教諭2回・SET2回、公開授業期間2回 (重点公開教員17名)	А	授業力向上に関する学校教育自己 診断の評価(肯定率)	89%	90%以上	92%	授業力向上への意識は高く、常にアクティブ ラーニングを主体とした授業を実施している教 員が20%から28%に増加している。	А	継続	ど、初任教員に対する研修も充実させている。他の教員研修の充実にも努めながら、教員の指導力向上をめざしていることは評価できる。	
の育		(3)10校が共通で実施する学力 調査									学力調査の結果	1年⇒	2年:-0.34	(A)、2年	:⇒3年:-0.16(A) *詳細は評価審議会資 T	料3に明	S	学力調査の結果において、1年から2 年、2年から3年ともにマイナスではあるが、学校として生徒の学力向上に取り	
成	V. 総合的な学力の測定	(4)大学入試センター試験への参加									大学入試センター試験 5教科7科目受験者の割合	77%	80%	73.2%	262名/326名 進路実現に向かう意識をしたかり維持するよう担任団がHRなどを通じて積極的にはたらきかけたことが奏功した。	В		組んでいる成果が見られる。 大学入試センター試験5教科7科目受験 者の割合が大きく伸びたことは進路指導 の成果だと考えられ、高く評価できる。 一方、5教科7科目受験者の得点率80%	А
		⑮大学入試センター試験の結果									大学入試センター試験5教科7科 目受験者の得点率80%以上	24%	15%	23%	60名/262名 5教科7科目受験者のうち、上位層は理系の生徒が占めた(文系22名、理系38名)。	A		以上の割合が減少したことについては、 その原因を分析し、今後の教科指導に活 かしてもらいたい。	
	** = = = = = = = = = = = = = = = = = =	16課題研究活動									外部でのポスター、プレゼン発表 数	1 0グルー プ	10グループ	1 7 グルー プ	SSH生徒研究発表会1本、マスフェスタ1本、 大阪サイエンスデイ12本、四條畷市民講座3本 発表。	A		外部でのポスター・プレゼン発表数及び コンクール・コンテスト入賞者数が増え ており、「探究ラボ」などにおいて、生 徒が課題研究に熱心に取り組んでいる様	A A
	Ⅵ. 課題研究活動	⑪コンクール・コンテスト等の 成果									外部のコンクール・コンテスト入 賞者	入賞7名	入賞10名	12チーム (24名)	京都大阪数学コンテスト1名、日本数学コンクール2名、化学グランプリ1名、ライオンズクラブ英語弁論大会2名、NBKビジネスアワード2名、大阪サイエンスデイ4チーム(16名)入賞。	А		子が窺える。 京都大学、大阪大学、神戸大学などの推 薦入試で多くの合格者を出していること はこれらの取組の成果であると考えら れ、評価に値する。	AA
· 注 () () () ()	は <u>5</u> 0 7 7 8 VII. 英語運用能力	®TOEFLiBT(チャレンジを含む)									TOEFLiBTスコア(チャレンジ を含む) ①80点以上の人数 ②60点~79点の人数	①1名 ②0名	①1名 ②4名	①0名 ②3名	7割の生徒は、昨年よりスコアを伸ばした。平均12%の上昇率だが、スコアを80%以上伸ばした生徒も4人いる。	В		TOEFL iBTのスコアは目標に達しなかったが、多くの生徒がスコアを伸ばしたとのことであり、SETの配置により、英語4技能を高める取組が一定の成果を上げたと言える。	AA
		⑨TOEFLiBT(チャレンジを含む)以外の英語外部検定試験									各種英語外部検定試験において CEFR ①B2レベル ②B1レベル	①新規 ②新規	① 4名 ②40名	①8名 ②85名	自主的に英検を受験した生徒が多く、目標に到達した。次年度以降は、計画的な受験により継続的な評価をしたい。	А		今後、英語科として、この間進めてきた 取組を継続し発展させていってもらいた い。	
		⑩スーパーグローバル大学(タイプAトップ型)への進学									スーパーグローバル大学(タイプ Aトップ型)13校への進学者数 (1浪含む)	54名	50名	55名	北大3・東北大2・筑波大2・名古屋大2・京都大10・大阪大28・広島大3・九州大3・早稲田大2のように、進学先は全国に広がりを見せている。	A		難関国公立大学への進学者数、国公立大学現役進学者数など、すべての指標において、数値を伸ばしていることは高く評価できる。	
	Ⅷ. 進学実績	②進学実績									難関3国公立大学(京大・阪大・ 神大)現役・浪人合格者数	60名	70名	69名	京都大10名・大阪大28名・神戸大31名の69名となった。いずれも現役合格が増えている。なお全盲の生徒も京都大学に現役合格することができたい。	A		価できる。 また、昨年度同様、広島大学、九州大学などにも合格者を出していることは、生徒と向き合って進路指導した成果であると考えられる。	AA
		②国公立大学への進学									国公立大学現役進学者数	127名	120名	135名	国公立現役進学者数が2年連続で増加した。意 欲の向上だけでなく、大阪市立大医学部医学科 に2名現役合格するなど目的意識を持った大学 選択が進んでいる。	А		一方で、5教科7科目受験者の得点率 80%以上の割合が減少していることから、引き続き合格実績を伸ばすことができるよう、今後はすべての生徒に対して高い志と希望進路の実現に向けた強い意	
		②海外大学への進学									海外大学進学者数(1 浪含む)	1名	1名	2名	ドイツのパルッカ・シューレ・ドレスデンに入学。6月にドレスデン・パルッカ・ダンス大学に進学見込み。	А		志を育むよう取組をすすめてもらいたい。	
			生徒に	よる学校の取組に対する肯定	的評価や学校生活に対	する満足	度がとて	ても高い	、それが四條畷高校の大きな	魅力	である。そのことは、	生徒たち	うが落ち	着いた恵	まれた環境で学業に励んでし	る姿な	か、		

生徒による学校の取組に対する肯定的評価や学校生活に対する満足度がとても高い、それが四條畷高校の大きな魅力である。そのことは、生徒たちが落ち着いた恵まれた環境で学業に励んでいる姿や、 熱心に学校行事・部活動に取り組んでいる姿を見れば理解できる。また、台湾修学旅行やオーストラリア・ベトナムなどの海外研修における国際交流、SSHを核とした課題研究の取組、卒業生による講演、大学への研究室訪問などにより、主体的・協働的に取り組む力や、質実剛健な人間力、豊かな感性などを育んでいる。これまでの「質実剛健」「文武両道」の伝統を誇りとしながら、「守る伝統から創る伝統へ」というキャッチフレーズのもと、将来、国際的に活躍できるグローバルリーダーの育成をめざして、取組を進めてもらいたい。

Δ

府立高津高等学校

A・・・・きわめて高い成果をあげている A・・・計画以上 自己評価の基準 B・・・おおむね計画通り 評価審議会 A ・・・成果をあげている A ・・・成果をあげている

C···計画以下

A …成果をあげている B …取り組んでいるが工夫改善の余地がある

資料2-2

事業目的	大項目	小項目	今年度の 取組方針	D 取組	取組指標	前年度実績	目標値	実績	実績の詳細	自己評価	成果指標	前年度実績	目標値	実績	実績の詳細 自己 評価	以 次年度の評価審議会の評価取組方針コメント	評価
		①学習方法の定着 読解カリテラシー	継続	1 年生学習合宿	参加生徒数	1年生全員	1年生全員	1 年生全員	1年生全員参加/参加姿勢も「良」	А	高校での学習方法が学べたと回答した 生徒の割合	99%	95%	98%	メリハリのついた参加態度で、例年にも増 して大きな成果が得られた。	継続 入学当初に行う学習合宿や校内課題 研究発表会は高津高校の行事として	
	I. 確かな学力の向上を図る 「小項目(はぐくみたい力)」 ・言語活用力 ・ICT活用力 ・読解力リテラシー	②言語・ICT活用力	継続	校内課題研究発表会	参加生徒数	約1,300人	1,300人	約1,300人	外部からも参加いただいた午前の課題研究発表会はもとより、午後の校内での発表会にも 普通科生徒が主体的に参加し、例年に勝ると も劣らない内容であった。	A	取組みが充実していたと回答した生徒 の割合	98%	95%	95%	生徒の取組み姿勢も年々向上し、本校における最重要な学校行事へと着実に進化・深 A 化している。	定着し、生徒の参加態度も年々向上しているようであり、また、アンケートによる生徒の評価は非常に高いことからも、生徒にとって有意義な取組であると言える。	А
	・ 科学的リテラシー ・ 英語運用能力 ・ その他	③英語運用能力	再編	①英語コミュニケーション講座 (KITEC) ②ニュージーランド語学留学	参加生徒数	①1・2年生 全員参加 ②10人	①1・2年生 全員参加 ②10人	①今年度から、基礎コースと発展コースで実施。延べ502人参加②10人	①については、コース別実施により、さらに効果的な研修となった。 ②NΖ語学研修には、参加定員の約2倍の希望があり、現地においても充実した体験ができた。	i A	それぞれの取組みを通して、英語に対する興味・関心、運用能力が向上した と回答した生徒の割合	①98% ②新規	①98% ②100%	①99% ②100%	①KITEC2年生の参加形態を個々の実力に応じたコース制としたことで、より効果的な研修となった。 ②自然豊かな環境にも恵まれ、英語はもとより文化的な交流にまで発展させることができた	また、英語コミュニケーション講座 (KITEC) やニュージーランド語学 留学も、参加したほぼすべての生徒 充実 が英語に対する興味・関心、運用能 力が向上したと回答しており、効果 的な取組となっていると言える。	
	II. 豊かな感性と、たくましく 生きるための健康と体力をはく くむ	④健康•体力、協調性	再編	自治会が主体となった文化祭・体育祭の実 施	参加団体数	全クラス、有志 等:23団体	をクラス、有 志等:20団体	全クラス、有 志等:20団体	分割実施初年度であったが、例年通り、数多 くの有志団体等の参加があり、高津らしく、 活気のある活動であった。	1 ^ 1	記念祭に満足したと回答した生徒・保 護者の割合	生徒98% 保護者95%	生徒・保護者 95% (「分からな い」を除く)	生徒・保護 者ともに 95%	分割実施初年度で、準備当初には生徒に戸惑いも見られたが、新たな実施形態が故に、生徒たちの一致団結した活動が促進され、深化を遂げることができた。	昨年度まで9月に一括で行っていた 体育祭と文化祭については、熱中症 の生徒が出たことから、6月に体育 祭、9月に文化祭と分割したが、生 徒・保護者の満足度は高い。	
	- 小項目(はぐくみたい力) ・違いを認め共に生きる力 ・共感力 ・協調性 ・紛争を解決する力 ・健康・体力 学	⑤違いを認め共に生きる力、共感 力、協調性	再編	①高津キャラバン隊(ボランティア活動) ②支援学校との交流	①参加クラブ数 ②参加生徒数	①全クラブ ②生徒自治会、 クラブ3団体	①全クラブ ②生徒自治 会・クラブ3 団体	①全クラブ ②ビデオメッ セージでの参 加	①全クラブがますます積極的に取り組んだ ②インフルエンザのピークと重なり、相手が 生徒への配慮から急遽ビデオメッセージでの 参加に切り替えざるを得なかったが、生徒だ ちのスピーディかつ積極的な取組みには素晴 らしいものがあった。		それぞれの取組みが有意義だったと回 答した生徒の割合	①98% ②100%	①95% ②95%	196% 2100%	支援学校との交流については、当初予定通りの内容では実施できなかったが、逆に、 多様な交流の可能性について多くのことを 学ぶことができる好機会となった。	高津キャラバン隊として行っている ボランティア活動は、すべてのクラ ブが参加し成果をあげている。支援 学校との交流はビデオメッセージに 切り替えたが、すべての生徒が有意 義だったと回答している。いずれも 工夫し実施している点で高く評価で きる。	AA
	独 自 の 現をめざす 取 組 :小項目(はぐくみたいカ) ・規範意識 ・高い志 ・その他	⑥高い志	充実	①大学等外部団体の公開講座・実習等への参加 ②外国の高校等との交流・発表 ③国内(東京・九州)・海外へのサイエンスツアー	①参加生徒数 ②参加学校・生徒数、実施日 数 ③参加生徒数、実施日数	①1,601人 ②10校、36 人、3泊4日 ③118人 国内2泊3日 海外4泊5日	①1,500人 ②12校36 人、3泊4日 ③120人 国内2泊3日 海外4泊5日	①1,717人 ②12校35 人、3泊4日 ③119人 国内2泊3日 海外4泊5日	①1,717人と目標値を大幅に超えることができた。 ②国際情勢に鑑み、行き先が急遽変更(韓国⇒台湾)となったが、先方の理解も得て、期待以上の成果をあげることができた(台湾:生徒35人、教員10人参加) ③体調不良のため、参加生徒数は目標値を1人下回ったが、プログラムの改善により、例年を上回る成果をあげることができた。	A	それぞれの取組みが有意義だったと回 答した生徒の割合	①94% ②96% ③99%	①95% ②95% ③100%	①94% ②96% ③98%	来年度のSSH重点枠が不採択となったため、全体の計画を見直すが、他の国費事業への申請も検討し、内容についてはさらなる向上を図る。	大学など外部の公開講座や実習に参加する生徒数が年々増えていることは評価できる。今後も、高い志を育み、学習意欲を高めることができるよう、生徒を校外で活躍させる取組の充実に期待する。 1,2年生の原則全員が土曜講習に参加しているが、役立ったと回答したとはの32%であり、使はないまた。	В
		⑦進路実現	充実	土曜講習	実施日数	1年 22日 2年 19日 3年 31日	全学年20日以上	1年 19日 2年 19日 3年 21日		A	土曜講習が学力向上や進路実現(決 定)に役立ったと回答した生徒の割合	72%	73%	73%	1・2年生の原則全員参加が定着し、内容的にも一層の充実が見られた A	組と比べると低いため、実施方法や 内容について改めて見直すことも必 要ではないかと考える。	
知識基	N. 教員の指導力向上をめざす : 小項目(はぐくみたいカ) ;	8授業指導力向上	充実	研究授業・研究協議、授業参観の実施	各取組みの実施回数	研究授業8回 研究協議8回 授業参観8回	研究協議了回	研究協議了回	授業参観の回数を大幅に増やすことで、研究 協議の場を超えた、日常的な意見交換を促進することができた。	Z A	本校の授業は、知的好奇心を抱きやす いなど、内容が濃いと回答した生徒の 割合	73%	75%	74%	2020年の大学入試改革を見据える意識が 高まり、実績数値以上に教員の前向きな姿 A 勢が感じられた	今年度から、教科・分掌・学年ごと に到達目標を立て提出させるなど、 授業改善をはじめ、教育活動の充実 に向けた組織的な取組が進められて いる。	
盤社会をリ	・授業力向上	⑨進路指導力向上	継続	民間教育産業と連携した進路指導研修	研修回数 研修参加教員数	16回 204人	15回 200人	13回 198人	同時開催もあり、実施回数は目標を下回ったが、内容的にはさらに向上することができた。	A	本校の教職員は生徒の進路実現に向けて積極的に取り組んでいると回答した生徒の割合	85%	85%	88%	「高津進路プログラム(KSP)」もほぼ 完成に近づき、特に3年生時の生徒の高い A 満足度を得られている	授業に対する生徒のアンケートによる評価は依然として低い状況であるが、教員の意識が変化し、生徒の進路実現に向け、教科で指導する体制が生まれており、今後の発養に関係した。	AA
ードする人な		⑩教材開発、授業効果の向上	再編	①補助教材(オリジナル)の工夫 ②シラバス到達目標のブラッシュアップ	①補助教材にさらに工夫を凝らした教員の割合 ②実施教科数	①100% ②全教科	①100% ②全教科	①100% ②全教科	現在も継続的に取り組んでいるが、すでに現時点で、すべての教員が、より前向きに取り組んでいる。	A	①生徒授業アンケート質問5(教科書の他、プリントや視聴覚教材等をうまく使っている)に対する評価②生徒授業アンケート質問9(授業を受けて知識や技能が身についた)に対する評価	①3.3 ②3.2	①3.3 ②3.2	①3. 4 ②3. 3	指標とした2つの項目だけでなく、ほぼすべての項目で前年度を上回るなど、教員の A 日々の努力が形として表れている	の改善に期待したい。 今後、さらなる授業改善に向けて、 具体的な改善策を検討し、すべての 教員が同じ目標に向かって、実践し てもらいたい。	
がの育		③10校が共通で実施する学力調査									学力調査の結果	1 年⇒;	2年:-0.53(B)、2年=	⇒3年:-0.02(A) *詳細は評価審議会資料3に	では、	
成 	V. 総合的な学力の測定	(4)大学入試センター試験への参加									大学入試センター試験 5教科7科目受験者の割合	83.4%	85%	78.4%	目標値をやや下回ったが、多くの生徒が最後まで努力を続けるようになり、「チーム高津」として頑張る意識はさらに高まりつつある。	ついて、分析のうえ、改善策を検討してもらいたい。 大学入試センター試験5教科7科目 受験者の割合は増えたが、得点率8 割以上の生徒の割合が下がったこと	А
		⑤大学入試センター試験の結果									5教科7科目受験者における得点率 8割以上の生徒の割合	22.3%	20%	19.0%	目標値をやや下回ったが、2年生時から3年生にかけての伸びは大きく、生徒・教員が一体となり、しっかりと努力することができた。	については、学校として分析を行い、今後の取組に活かしてもらいたい。	
		16課題研究活動									課題研究活動を通じて、科学的な調査・分析・整理・発表の道筋を学べたと回答した生徒の割合	92%	95%	91%	1年次LCIの取組みの改善により、2年次LCIへのより円滑な導入が可能となったことで、生徒の取組み精度は格段に向上した。	課題研究の指導についてはすでに定着しており、生徒の肯定的評価はとても高い。また、コンクール・コンテスト等の入選数が大きく増えるな	
	VI. 課題研究活動 共 通 の	⑪コンクール・コンテスト等の成果									入選数	5本	8本	9本	・大阪府学生科学賞 最優秀賞 ・大阪府生徒研究発表会(サイエンスデー) 最優秀賞、銀賞2 ・マイクロマウス関西地区大会 特別賞 ・神奈川大学全国高校生俳句大会 入選 ・第12回赤十字・いのちと献血俳句コンテスト団体賞、大阪府赤十字センター所長賞 ・GLHS合同発表会 大阪府教育委員会賞	ど、その内容の充実ぶりが窺える。 SSHを核として取り組んでいるが、 理系のみならず文系の課題研究についても、GLHS合同発表会において 毎年優秀な成績を残すなど、その研究内容の質は高い。特に、発表方法 については常に工夫されており、そのレベルは高く、評価に値する。	В
	組	®TOEFLiBT(チャレンジを含む)									TOEFLiBTスコア(チャレンジを含む) む) ①80点以上の人数 ②60点~79点の人数	①1人 ②13人	①2人 ②15人	①3人 ②15人	AEコースも2年目となり、より安定した 授業を展開できた。1年生でもスコア60 以上の者が7人と高結果となり、今後に大 いに期待したい。	TOEFLIBTチャレンジのスコアが目標値を大きく上回ったことからも、アドバンスイングリッシュコースの設定が成果に繋がったと言える。また、学校として生徒にGTECや英	
	Ⅶ. 英語運用能力	19TOEFLiBT(チャレンジを含む)以外の英語外部検定試験									②実用英語技能検定	49人 ②準1級2人	7人 Grade6: 50人	①Grade7 5人 Grade6: 62人 ②準1級3. 2級180人	: 目標をほぼ達成できた。特に実用英語検定では、1年生学年団の継続的かつ統一的な働きかけにより、2級取得者が大幅に増えるなど大きな成果を収めることができた。2020年の大学入試改革を踏まえ、来年度はGTECに重点的に取り組む予定。	検にも継続してチャレンジさせ、その実績を大きく伸ばしていることは高く評価できる。 今後も、英語科がチームとして、生徒に英語4技能を身に付けさせることができるよう、取り組んでもらいたい。	AAA
		⑩スーパーグローバル大学(タイプ Aトップ型)への進学									スーパーグローバル大学(タイプA トップ型) 13校への進学者数(1浪 含む) 近畿圏難関国立大学(京大・阪大・神	59人	60人	41人	目標は下回ったが、近畿地区にとどまらず 広く全国を視野に入れる生徒は増えてい B る。 目標は少し下回ったが、医学部医学科が増	国公立大学現役進学者数は昨年度実 績を維持したものの、近畿圏難関国 立大学とスーパーグローバル大学へ	
	Ⅷ.進学実績	②進学実績									近畿圏難関国立大学(京大・阪大・伊大)及び医学部医学科への現役・浪人 合格者数	77人	80人	70人	日標は少し下回ったが、医学部医学科が増えるなど安定した成果を上げることができ た。	の進学者数は目標を下回る結果と なった。 	А
		②国公立大学への進学									国公立大学現役進学者数	132人	130人	126人	目標値達成し、安定した成果を上げること ができた。	ついて、各教科がその理由を分析することで、今後の教科指導に活かし	
		③海外大学への進学									海外大学進学者数(1 浪含む)	0人	1人	0人	大学進学後の留学を希望する者は多い。 B	てもらいたい。	
							^ -	+				. > — 1			シュコースを記案し、英埃の成績		

総合評価

高津高校では100周年を迎え、「もっと自由にもっと創造」を合言葉に、新たなことに取り組んでいる。例えば、英語教育では平成28年度からアドバンスイングリッシュコースを設置し、英検の成績において圧倒的な伸びを示している。また、教員の指導力向上をめざした取組では、「高津授業メソッド」の確立をめざし授業のノウハウや各教科のグッドプラクティスを収集したり、教科・分掌・学年ごとに到達目標を設定し、すべての教員が同じ目標に向かい授業改善や教育活動の充実に取り組むなど、その成果が現れつつある。創立100周年事業として食堂を改装したラーニングコモンズ(高津クリエイティブラボ)も有効に活用し、今後も、高津ならではの「自由と創造」の校風に基づく工夫・充実した教育活動により、国際社会で活躍するグローバルリーダーの育成に努めてもらいたい。

Д

府立天王寺高等学校

 自己評価の基準
 A・・・計画以上
 A・・・計画以上
 評価審議会 評価の基準
 A・・・高い成果をあげている A・・・成果をあげている B・・・・成果をあげている B・・・・取り組んでいるが工夫改善の余地がある C・・・・取組の見直しが必要である

資料2-3

車業			今年度の							□					C ・・・取組の見直しか必要である 		か 午 使 の		
目的	大項目	小項目	今年度の 取組方針	取組	取組指標	前年度実績	目標値	実績	実績の詳細 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	<u> </u>	成果指標	前年度実績	目標値	実績	実績の詳細	評価	次年度の 取組方針	コメント	評価
	I. 確かな学力の向上を図る 小項目(はぐくみたいカ)	①自学自習の確立	継続	桃陰セミナーの実施 (勉強は学校でする自学自習の習慣づけ)	桃陰セミナー実施回数	200	200	200	全20回実施した。 A	桃陰セミナ- 者数。	- 1 日当たりの平均参加	257名	250名	260名	20回分の平均参加人数	A	継続	学校で自学自習する習慣づけをめざ した卒業生に質問できる桃陰セミ ナーを土曜日に毎週のように実施 し、多くの生徒が参加していること は評価に値する。	
	・言語活用力 ・ICT活用力	②基礎学力の充実・確立	継続	天高スタンダードの充実(各学年で達成する 学力基準)及び学力育成プログラムの見直し	天高スタンダード達成目標の見 直し、学力育成プログラムの見 直し、 自主教材の作成。	自主教材 (国・世・ 数・化・ 英)使用	各教科より 良き改訂を めざす	自主教材 (国•世• 数•化• 英)使用	数学科、化学科、英語科は改訂版を 作成した。	天高スタンタ	ダード到達目標の達成率	86%	80% 以上	89%	各教科達成率自己評価の平均	А		また、各教科が目標の達成に向け、 自主教材の改訂に取り組むなど、教 科としてのまとまりの良さは天王寺 高校の大きな特長であり強みでもあ る。	AA
	· その他	③英語運用能力	継続	「Road to GL」(ネイティブ講師による5 日間校内留学)の充実	昨年度立ち上げた新企画「Road to GL」の昨年度並みの実施	参加者 85名	参加者85名以上	98名	1年90名 2年8名 参加した。 A	ΓRoad to (GL」参加者の満足度	100%	80% 以上	99%	参加者アンケートより	А	継続	昨年度から実施しいている「Road to GL(ネイティブ講師による5日間校内留学)」には多くの生徒が参加するとともに、ほぼ全員が満足したと回答している。	
	Ⅱ. 豊かな感性と、たくましく生きるための健康と体力をはぐくむ	④人権意識、共感力の育成	継続	天高育成プログラムで示される力の育成 人権講演会、ワークショップの実施	人権講演会の回数 ワークショップの回数	040 ●40	40 40	05□ ●4□	1年●ネット社会○貧困と野宿 ○障がい者の社会参加 2年○事件被害者と人権○セクシャルマイノリティ○ A 戦争と人権 3年●雇用と人権●国際問題●人権感覚	講演会ごとの満足度	D生徒アンケートによる	90%	85% 以上	92%	充実した感想文が多数寄せられた。	А	継続	天王寺高校では、3年間の学びの流れや各行事を通じて身に付けさせたい資質・能力などをまとめた「天高育成プログラム」を早くから作成	
224	小項目(はぐくみたい力) ・違いを認め共に生きる力 ・共感力 ・協調性	⑤健康と体力と協調性を育む	継続	天高育成プログラムで示される力の育成 野外生活体験学習、水泳訓練、水泳大会、 金剛登山、徒歩訓練、長距離走などの実施	計画通りの実施	計画通りの 実施	計画通りの 実施	計画通りの 実施	野外生活体験学習(7月)、水泳訓練(7月)、水泳大会(8月)、勉強合宿(8月)、長距離走(1月)、金剛登山・徒歩訓練(2月予定)	行事ごとの生	E徒アンケートによる満	85%	85% 以上	90%	充実した感想文が多数寄せられた。	А	継続	し、生徒や保護者に示している。そのプログラムには、電気も水道もない山荘で行われる野外生活体験、水泳訓練や金剛登山のほか、文楽・能楽鑑賞など多様な行事が散りばめら	AA
校独自	・紛争を解決する力・健康・体力・その他	⑥日本古来の伝統に触れる (感性の育成)	継続	天高育成プログラムで示される力の育成 能楽鑑賞、文楽鑑賞	計画通りの実施	計画通りの 実施	計画通りの 実施	計画通りの 実施	文楽鑑賞(2年生11月) 能楽鑑賞(1年生 1月)	行事ごとの生	E徒アンケートによる満	88%	85% 以上	89%	充実した感想文が多数寄せられた。	А	継続	れている。すべての行事が生徒の主体性や協調性などの育成につながっており、生徒の満足度も高い。	
の取組	Ⅲ. 高い志をはぐくみ、進路 実現をめざす	⑦規範意識の陶冶と自尊感情の育	継続	学校遅刻者の減少	学校遅刻者数	1439	1800以内	1800	目標は達成したが、361件増加し た。	部活動へのか	0入率	100%	95%維持	100%	学校教育自己診断より	А	WE NO 0	部活動については、運動部と文化部 を兼部する生徒も多く、入部率は非 常に高い。 天高アカデメイアでは大学の研究者	
	・その他	⑧高い志の育成	継続	天高育成プログラムで示される力の育成 京都大学研修会、 社会人講演会、学部学科説明会 天高アカデメイア等の実施。	講演会の実施回数	メイア	天高アカデ メイア 10回以上	メイア	12回のうち英語での講演会4回実施 ①哺乳類の血液粘度・関大・山本教授② 災害救援・NGO・Robin Lewis③医学英 語・奈良医大・Paul Mathieson④放射 能の生物影響・茨城大・中村教授	各見学会や調トの満足度	構演会参加者のアンケー	89%	85% 以上	97%	講演会では活発な質疑応答が行われ、 充実した感想文が多数寄せられた。	A	継続	や各界で活躍する社会人による講演が行われ、12回のうち4回がオールイングリッシュであるなど、生徒にとっては大きな刺激となっており、生徒の満足度も非常に高く、評価に	AA
		⑨海外セミナーの実施	継続	SSH、GLHS等を活用した海外研修。 (CAMBRIDGE、他) 独自の取り組みによる海外セミナー (台湾)	独自の取り組みによる海外セミ ナーとして台湾研修を充実させ る。	参加者30名	参加人数 30名以上	①② 計39名	①ブルネイ&シンガポール研修 生徒24名(1月)【新規】 A ②台湾研修生徒15名	海外セミナー	-参加生徒の満足度	90%	90% 以上	90%	充実した感想文が多数寄せられた。	А	継続	値する。。 また、SSHやGLHSによる海外研修でも参加した生徒の満足度は高く、 有意義な取組と言える。	
知識基	Ⅳ. 教員の指導力向上をめざ す	⑩研究授業の実施 教員相互の授業見学実施	継続	研究授業を行う。他の教員の授業を見学する。授業公開週間を設置する。	①研究授業の回数。 ②教員1人当たりの授業見学回 数。	①研究授業 延べ20回 ②授業見学 平均6.1回	延べ15回 ②授業見学	①研究授業 延べ17回 ②授業見学 平均5.2回	国語1回・社会1回・数学3回・理 科2回・英語1回・体育9回の実施。 このうち外部に公開したもの2回。	生徒による担度)	受業アンケート(満足	第1回 84.3% 第2回 86.3%	80% 以上	第1回 86.5% 第2回 87.8%	第1回 7月実施 3.46/4.00 第2回12月実施 3.51/4.00	A		天王寺高校では早くから「天高スタンダード」を活用した教科での取組 を推進している。教員間の同僚性が 非常に高く、そのことが教科指導力	
盤社会をリ	小項目(はぐくみたい力) ・授業力向上 ・教材開発	⑪教科指導研修会の実施	継続	外部講師による教科指導法向上の講座を開講する。	外部講師による教科指導法講座の回数。	外部講師に よる教科指 導法講座 9回	外部講師に よる教科指 導法講座 5回	外部講師に よる教科指 導法講座 11回			学校教育自己診断アン 美や教材、教え方の満足	91%	85% 以上	90%	学校教育自己診断より	А	継続	の維持・向上に繋がっている。 教員間の授業見学・研究授業、外部 講師による教科指導法に関する講 座、新採用・新着任を対象とした首 席・各分掌長などのミドルリーダー	А
ードする-	・その他	⑫新採用や経験の浅い教員対象 の研修会	継続	桃陰塾として実施する。	毎回ミドルリーダーによる講師 を変えて実施する。	7回実施	7回実施	7回実施	講師は首席、各分掌長、SSH主担、 人権主担	参加教員の満	 最足度	94%	85% 以上	88%	新採用(2名)新着任(9名)を対象に実施。	А		による講義など、さまざまな形で指導力向上に取り組んでおり、生徒の授業満足度は非常に高く評価できる。	
材の		⑬10校が共通で実施する学力調 査								学力調査の約	吉果	1年⇒2年	:-0.17 (A)、2年⇒3	3年:-0.50(A) *詳細は評価審議	会資料3	3に明記	学力調査の結果において、1年から	
育成	V. 総合的な学力の測定	(4)大学入試センター試験への参加								大学入試セン 5教科7科目	リター試験 受験者の割合	338名中、 324名 95.9%	95% 以上	348名中、 331名 95.1%	331/348 (全受験者数) 在籍数357名中348名受験した。	А	水圧がじ	2年、2年から3年ともにマイナスではあるが、学校として生徒の学力向上に取り組んでいる成果が見られる。 大学入試センター試験5教科7科目受	AAA
		15大学入試センター試験の結果									受験者における (上の生徒の割合	147名 (45.4%)	35%以上	142名 (42.9%)	142/331 0.5ポイント減少した。	А		験者の割合、また得点率8割以上の 生徒の割合を高い水準で維持してい ることは評価に値する。	
		16課題研究活動								ルーブリック	7評価の導入		研究発表会 において1 回以上導入 する	+	・アクティブラーニング型授業を 取り入れた…98.2%・ルーブリック評価を試みた…80.4%	A	継続	多くの教員がアクティブラーニングを取り入れたり、ルーブリック評価を試みるなど、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて組織的に取り組んでいることは評価に値す	
共通	VI. 課題研究活動	⑪コンクール・コンテスト等の 成果									コンクール・コンテスト 皆数 ②入賞者数	① 238名 ②19名	①100名 ②5名	①265名 ②12名	・物理チャレンジ 15名【銀賞1・優秀賞1】 ・化学グランプリ 80名【銀賞2】 ・生物がパック 80名【敢闘賞2・優秀賞2・優良賞3】 ・情報オリンピック 13名 ・数学オリンピック 67名【Aランク1】 ・科学の甲子園 6名 ・高校模擬国連 2名	А	4m/4±	る。。 学校として科学オリンピックへの参加を促すなど、全国規模のコンクール・コンテスト等の受験者数が大きく増加していることは高く評価できる。	А
即組	Ⅷ. 英語運用能力	®TOEFLiBT(チャレンジを含む)								TOEFLIBT: (チャレンシ ①80点以 ②60点へ	グを含む)	①6名 ②18名 (2クラス中)	①2名 ②10名 (2クラス中)	①2名 ②12名 (2クラス中)		А	再編	TOEFLiBT、英検の結果については、SETを含む英語科教員全員が生徒の英語4技能の育成に取り組んだ成果だと言える。	^ ^
		⑩TOEFLiBT(チャレンジを含む)以外の英語外部検定試験								実用英語技能		2級以上 63名	2級以上 20名	2級68名	準1級7名、2級61名	А		来年度以降も、この間の成果と課題を分析し、より充実した取組となるよう尽力してもらいたい。	AA
		⑩スーパーグローバル大学(タ イプAトップ型)への進学									コーバル大学(タイプA 3校への進学者数(1	113名	110名以上	140名		А		国公立大学現役進学者数、スーパー グローバル大学進学者数において昨	
	Ⅷ. 進学実績	②進学実績								国公立等医学	学部医学科進学者数 3)	21名	15名以上	21名		A	継続	年度実績を大きく上回ったことは高く評価できる。 医学部医学科への進学者数について 昨年度と同様の実績をあげているの	AAA
	A	②国公立大学への進学								国公立大学现	見役進学者数	150名 (42%)	全体の 40%以上	164名 (46%)		А	継続	も天王寺高校の特長であろう。 来年度以降もこれらの進学実績を維持・増加できるよう、今回の結果の 分析を行い、今後の教科指導、進路	
		33海外大学への進学								жи т жж	学者数(1浪含む)	1名	受験者を	0名		С	継続	ガがどが、ラ後の教科指導、進路 指導に活かしてもらいたい。	

総合評価

天王寺高校は、科目ごとに学力の到達目標を示した「天高スタンダード」や、3年間の学びのおおまかな流れや各行事を通じて身に付けることをまとめた「天高育成プログラム」など、現在、他の多くの府立高校が参考としている取組を先駆的に進めてきた。教員と生徒が一つひとつの行事や授業の目的を意識し一緒になって取り組むことで効果的な指導・学習を進め、大学進学実績やコンクール・コンテスト等の入賞者数などで大きな成果をあげている。教員と生徒が目標に向かって協働し取り組んでいるところが天王寺高校のすばらしさである。今後も、アクティブラーニングを取り入れた授業実践を蓄積するなど、府の教育を牽引する学校として、さらに教育の質を高め、将来の国際社会をリードしていくグローバルリーダーの育成に尽力してもらいたい。

ДД

府立生野高等学校

 自己評価の基準
 A・・・計画以上
 A・・・・高い成果をあげている

 自己評価の基準
 C・・・計画以下
 評価審議会 評価の基準

 B・・・・取り組んでいるが工夫改善の余地がある
 C・・・取組の見直しが必要である

資料2-4

事業目的	大項目	小項目	今年度の 取組方針	取組	取組指標 前年度実	遺 目	目標値実績	実績の詳細	自己評価	成果指標	前年度実績	目標値	実績	実績の詳細	自己 次年度の 評価 取組方針	評価審議会の評価 コメント	評価
	I. 確かな学力の向上を図る 「小項目(はぐくみたい力) ・言語活用力 ・ICT活用力 ・読解カリテラシー ・科学的リテラシー	①基礎学力の定着	継続	自学自習時間を増やす取組み 進学講習の実施	学習状況調査の実施 3回 進路HRの実施 各学年5[3年進学講習参加者数 延べ1221	(回 各学 名 延べ	3回 3回 学年5回 [*] 800名 延べ1384	3年後期通常講習338名	А	各学年の自学自習時間 1年・2年平日の平均自学自習1時間 未満の割合 進路希望達成率	1年65分 2年75.9分 3年219.7分 1年39.4% 2年26.7%	1・2年90分、3 年180分 1時間未満30% 以下 達成率65%以 上	1年91.1分 2年91.6分 3年221.0分 1時間未満 1年6.0% 2年18.6%	1月実施集計(※3年のみ11月集計)	A 継続	生野高校では学習と部活動の両立が課題となる中、自学自習時間の増加をめざした取組を進めてきた。これまで特に伸び悩んでいた1,2年生で実績を上げたことは高く評価できる。効果をあげた要因を分析し、今後のさらなる指導に活かしてもらいたい。	
	・ 検子的リテフシー ・ 英語運用能力 ・ その他	②言語活用力・ICT活用力	継続	プレゼンテーション能力の向上	プレゼンテーション発表者数(校 内・校外) 海外サイエンスッアーでの研究発表 校外:延 78名	\"\"\"\"\"\"\"\"\"\"\"\"\"\"\"\"\"\"\"	校内:延^ : 延べ720	 校外:オーストラリア語学研修、SSH	В	アンケートによる生徒の評価(2年 の発表を見た1年の満足度)	97.0%	90%以上	98.2%	2/1探究成果発表会	A 継続	プレゼンテーション能力の向上をめざし実施している成果発表会では発表者数が増えるとともに、2年生の発表を見た1年生の満足度は非常に高く、来年度の探究活動の質向上へと繋がっていくものと考えられる。 1学年で実施しているイングリッシュキャンプについては、生徒による評価が前年度実績を上回っているが、依然	AA
		③英語運用能力	継続	イングリッシュキャンプの実施	1 学年で実施 1年全員参	加 1年多	全員参加 1年全員参加	6/19・20集中講義形式で実施	В	アンケートによる生徒の評価(満足 度)	70.0%	80%以上	75%	生徒アンケート結果より (ネイティブの講師の質に差が見られた ため、満足度にばらつきがあった)	C 継続	低い状況にある。取組を継続するにあたり、改善に取り組んでもらいたい。	
	I. 豊かな感性と、たくましく生きるための健康と体力をはぐくむ 小項目(はぐくみたい力) ・違いを認め共に生きる力 ・ 共感力 ・ 協調性	④違いを認め共に生きる力	継続	異文化理解教育の推進	スタディツア-4: サイエンスツア-1: 海外スタディツア-・サイエンスツア-の参加者 数 韓国研修S 他 高津高校韓国研 短期留学1	5名 1名 合語 人 T修1名	スタディツア- 40名 計70名 サイエンスツア- 以上 10名 GLHS研修 1名	スタディツアー(オーストラリア) サイエンスツアー(アメリカ) マカオサイエンスツアーは中止	С	アンケートによる生徒の評価(肯定 的意見)	豪スタディツア- 100% サイエンスツア- 100% 韓国研修 100%	90%以上	スタディツアー 97.5% サイエンスツアー 100%	スタディツアー(オーストラリア)7月 サイエンスツアー 3月実施		オーストラリアスタディツアー・アメリカサイエンスツアーは、生徒のアンケート結果も高く、参加した生徒にとって意義あるものと言える。全国大会で優秀な結果を残すなど、部活動に熱心に取り組んでいるのは生野高校の特長である。ただ、今年度の学校教育自己診断では部活動・学校行事の値がともに下がっている。自学自習	А
学校独自の取	・紛争を解決する力 ・健康・体力 ・その他 	⑤共感力、協調性、健康・体力 を育む	継続	部活動・学校行事の活性化	自治会による部代表者会議及びリーダー研修会実施による所属集団への 貢献と自己目標追求の姿勢を涵養 学校行事に進んで参加する生徒の割 合	ダー グー クー	5回とリー 一研修 診加率85% 以上 年間6回 リーデ -研修 91名 行事参加率 87%	リーダー研修3/20実施	A	学校教育自己診断による生徒の評価 (達成感・満足度)	部活動熱心 80% 行事満足度 96.5%	部活動・HR活動 熱心85%以上 行事満足度・達 成度85%以上		全国インターハイ高校女子砲丸投げ2位 第63回全国写真展覧会 文部科学大臣賞	B 継続	時間が大きく増えたこととの関連などについて分析してもらいたい。自治会については、部代表者会議やリーダー研修を実施するなど、生徒の所属集団への貢献、取組意識や主体性を高めることに寄与している。	
組	Ⅲ. 高い志をはぐくみ、進路 実現をめざす 一. 小項目(はぐくみたいカ) ・規範意識 ・高い志	⑥規範意識	充実	欠席・遅刻を減らす取組み	家庭連絡の 教員の一致した指導 生徒指導部によ 的指導	保護有の び生指語 で生指語	との連携及 部による段 指導継続 徹底) 生徒指導部を中心とした一貫した 段階的指導と家庭との連携	A	3年欠席者数 遅刻者数	3年欠席数 1597 遅刻総数 1661	欠席数前年度以 下 遅刻数1500以 下	3年欠席者数 2081 遅刻総数 1393	前年度同時期遅刻数約270減	, _,,	生野高校では、生徒に規範意識を付けることをめざし、早くから欠席・遅刻の減少に取り組んできた。遅刻総数の減少という点では成果をあげているが、欠席者数が増えたことについて3	
知識基盤社会をリード	・ その他	⑦高い志を育む	継続	国公立大学へのキャンパスツアー 卒業生等による講演会 リーダー講習会 地域清掃等ボランティア活動	12年夢ナ 269名 12年夢ナ 269名	ビ 参加 1(3 7名 リーダ・ 可 参加: 97名 し 回 地地	の スツアー の 者合計 の の名 寅会5回 12年夢ナビ 328名 阪大83名 京大24名 京大24名 清習会 の 者80名 以上 地域清掃 2回以上	講演会 5/30 「再生医療」岸上義弘氏 10/20 「プレゼン道」松田卓也氏 2/2 「シンギュラリティ」松田卓也氏	; В	アンケートによる生徒の評価(肯定的意見)	夢ナビ 83.8% 京大キャンパス ガイド 参加満足度 100%	80%以上	81.6% ‡ャンパスガイド 参加満足度	夢ナビ (6/17) 事後アンケートによる 1年生参加率が上昇 京大キャンパスガイド (11/5) 事後アンケートによる	A 継続	年学年としての分析が望まれるところである。 大阪大学や京都大学などが行う企画への参加者数は多く、また1,2年生を対象とした夢ナビの参加者数も増えており、生徒の満足度も高く、評価に値する。。 今回、大阪大学の世界適塾入試で多くの合格者を出したが、大阪大学との連携事業との関連なども確認してもらいたい。	Α
する人材の育	Ⅳ. 教員の指導力向上をめざす 「小項目(はぐぐみだい力)」 ・ 授業力向上 ・ 教材開発	⑧授業力の向上	継続	校内における研究授業の実施 授業の相互参観	研究授業の回数 参観率 90.59 相互参観の教員参加率 平均3.2[0 I <u>~</u>	対1回以上 参観率 69.4% 全教員 平均3.0回	11月学年互見授業週間実施	В	授業評価による授業理解度	1年 79.9% 2年 85.9% 3年 84.6%	1年 70%以上 2年 80%以上 3年 85%以上	1年 83.3% 2年 82.6% 3年 88.1%	第2回授業アンケート(12月実施) 「授業を受けて十分理解できている」 への回答	B 継続	教員相互の授業見学や研究授業、生徒による授業アンケート結果による教員の振り返り、民間教育産業等による研修を行うなど、組織的に授業改善に取り組んでいる。 ただ、今年度、教員相互の参観率が大	В
成	・その他	⑨授業力の向上	継続	民間教育産業等の研修への参加	参加者数 延べ94名	4	45名 延べ86名	2月末最終集計	В	授業評価による授業理解度	1年 79.9% 2年 85.9% 3年 84.6%	1年 70%以上 2年 80%以上 3年 85%以上	1年 83.3% 2年 82.6% 3年 88.1%	第2回授業アンケート(12月実施) 「授業を受けて十分理解できている」 への回答	B 継続	きく減ったことについては、その原因を分析し、次年度の取組の改善に繋げてもらいたい。 1,3年生で、授業アンケートによる授業理解度が伸びていることは評価できる。	D
		⑬10校が共通で実施する学力調 査								学力調査の結果	1年	⇒2年:-0.72 (B)	、2年⇒3年:	+0.38(A) *詳細は評価審議会資料3に	明記	学力調査の結果において、特に1年から2年でマイナスが大きいことについ	
	V. 総合的な学力の測定	個大学入試センター試験への参加								大学入試センター試験 5教科7科目受験者の割合	77.8%	80%	73.3%		The means to	て、分析のうえ、改善策を検討してもらいたい。一方、2年から3年ではプラスになっていることは評価できる。大学入試センター試験5教科フネスので	А
		⑤大学入試センター試験の結果								大学入試センター試験の5教科7科目の受験者の得点が全国平均(900 点満点)の110%以上の割合	文系62.2% 理系57.3%	60%	文系62.6% 理系56.7%			験者の割合が昨年度実績を大きく伸ば しながらも、5教科7科目の受験者の 得点が全国平均の110%以上の割合 を維持していることは評価に値する。	
		16課題研究活動								アンケートによる生徒の評価(2年 の発表を見た1年の満足度)	97.0%	90%以上	98.2%	2/1探究成果発表会	 A 継続 	課題研究についてはSSHを中心としてその取組が充実していることが、2年生の発表を見た1年生の評価が非常	
共通の	VI. 課題研究活動	⑪コンクール・コンテスト等の 成果								科学系オリンピック・コンテスト等 の参加者数	84名	75名	86名	大阪学生科学賞 大阪科学技術センター賞塩見直道記念「数学の自由研究」奨励賞受賞大阪サイエンスデイオーラル部門金賞1、銀賞2、ポスター部門銀賞2	B 継続	に高いことからも窺える。 科学系オリンピック・コンテスト等の 参加者数が増えていることも評価でき る。	В
取組	Ⅷ. 英語運用能力	®TOEFLiBT(チャレンジを含む)								TOEFLiBTスコア(チャレンジを含む)①80点以上②60点~79点の人数	①0名 ②1名	①0名 ②1名		60点以上9名、50点以上29名、 平均点13点上昇	A 継続	TOEFL iBTチャレンジのスコアで60 点以上が9名出るなど、成果をあげて いる。また、早くから学校全体で取り 組んでいる英検についても、2級の取	AA
		⑨TOEFLiBT(チャレンジを含む)以外の英語外部検定試験								英語検定2級の資格取得率 (2年生終了時点)	45.0%	50%	46.5%	1/19実施	B 継続	得率が伸びていることは高く評価できる。	
		⑩スーパーグローバル大学(タイプAトップ型)13校への進学								スーパーグローバル大学(タイプA トップ型)13校への進学者数(1 浪含む)	44名	47名	50名		B 継続	国公立大学現役進学者数やスーパーグローバル大学13校への進学者数な	
	Ⅷ. 進学実績	②進学実績								進路希望達成率	72%	65%	63.9%		B 継続	ど、前年度を超える実績を出したこと は高く評価できる。 次年度以供表現の実施をはある。	AAA
		②国公立大学への進学								国公立大学現役進学者数	124名	_	149名		A 継続	組や進学講習の実施などを継続し、進 学実績をさらに伸ばすことができるよ う、尽力してもらいたい。	
		②海外大学への進学								海外大学進学者数(1 浪含む)	1名	_	1名		B継続		
			小 邸 吉	がでけち細領におる「	「質実・剛健・自重・自治・至誠」	といった	が同ち大切にし	た学校づくりを行ってきた	= t-	- CL USの指定なAH	オーフト=	$\frac{1}{2}$	ワディツエ	フーからと1世庁に トスフィー	ー Iカサイエ		

総合評価

生野高校では五綱領にある「質実・剛健・自重・自治・至誠」といった校風を大切にした学校づくりを行ってきた。また、GLHSの指定を受け、オーストラリアへのスタディツアーやSSH指定によるアメリカサイエンスツアー、大学と連携した取組などを行い、グローバル人材に求められる主体性や協調性、 語学力やコミュニケーション能力、異文化理解などを育んでいる。部活動がとても盛んで、体育系、文化系の両方において全国的に活躍する部が多くある中、生徒に学習と部活動の両立を意識させ自学自習時間を増やす取組や、遅刻・欠席を減らす取組を進めてきた。その中で、今年度、1,2年生の自学自習時間が大きく増加したことは大きな成果であり、大学進学実績などの向上にも期待が膨らむところである。今後も、国際的に活躍できるグローバル人材の育成をめざし、取組の充実を図ってもらいたい。

Δ

府立三国丘高等学校

A・・・計画以上
自己評価の基準A・・・計画以上
日・・・・おおむね計画通り
C・・・計画以下AAA ・・・高い成果をあげている
AA ・・・成果をあげている
B ・・・取り組んでいるが工夫改善の余地がある
C ・・・取組の見直しが必要である

資料2-6

事業目的	大項目	小項目	今年度の 取組方針	取組	取組指標	前年度実績	目標値	実績	実績の詳細自証証	成果指標	前年度実績	目標値	実績	実績の詳細	自己評価	次年度の 取組方針	評価審議会の評価 コメント	評価
	I. 確かな学力の向上を図る	1. 基礎学力及び自学自習力の 向上	充実	①隔週土曜授業の実施 ②三丘エクセレンス、三丘スタディーハードの充実 ③成績不振者講習の実施(1・2年生)	・実施回数 ・実施回数 ・実施回数(実施教科)	•15 © •62 ©、460 © •760	・15回 ・50回、400回以上 ・学期に15回以上	• 150 • 700 • 2530 • 810	・隔週実施・発展的な内容などの講習を実施・定期考査間に成績不振者講習を実施して基礎学力の向上を図っている。	・アンケートや感想 ・ 1,2年生での自学自習を2時間以 上行う生徒の割合 ・補充講習への出席率	・77% ・1年41%、2年 54% ・100%	・肯定的意見60%以上 ・ 50%以上 ・ 100%	・57% ・1年34%、2 年58% ・100%	1年生の自学自習時間が増加しないのが課題。	В	が控制と	隔週で土曜授業を実施するとともに、発 展的な講習や成績不振者補習を数多く実 施するなど、生徒の学習状況にあわせ、	
	小項目(はぐくみだい力)	2.読解カリテラシー育成	継続	④読書指導の充実 ⑤文章要約、文章能力の育成	・読書案内の発行 ・読書記録シートによる指導(1、 2年全員)	・図書だよりを 3回発行・記録シートを 提出	• 年間3回 内容充実 • 学期提出	・図書だより5回発行・記録シートを提出	・「図書たより」を発行 ・毎月1回記録シートを提出させて日常的な 読書を推奨する。 ・定期的に100字要約を提出させ、添削指導 している。	・読書シート提出による自主読書量 ・2年次は課題図書の読書ノート	• 1 年次平均14冊 • 2年次7冊	・1、2年で学期に5 冊以上 ・2年次課題図書年間 5冊以上	自由読書5冊	・読書量を増加させ、文章力育成に繋がっている	А	継続	個別に指導を行っている。また、読解力や文章要約力などの育成をめざし、読書記録シートによる添削指導や課題図書の設定などに取り組んでいることも評価に値する。 課題研究についても、SSH,SGHの取組	A A
		3. 科学的リテラシー、 ICT活用力及び 課題解決能力を育む	充実	⑥「課題研究(CS研究)」などの充実 ⑦プレゼンテーション能力の向上	・大学研究室の訪問回数 ・CS研究 I ・ II の充実 ・校内外での発表会等でのプレゼン	・14回 ・文理学科1,2 年毎週実施 ・年間17回	・10回 ・毎週継続実施 ・のベ年間10回	・11回(東大、京大 阪大、市大、府大)・文理学科1,2年毎週実施・のべ21回	・東大、京大 阪大、市大、府大の研究室を 訪問。 ・1年文理学科で課題研究基礎、2年文理学 科、SSH・SGHの課題研究を毎週実施。 ・CS3回、SSH8回、SGH10回	・「課題研究(CS探究)」の発表回数 ・実施後のアンケートや感想	• 17回 • 肯定的意見85%	・口頭及びポスター発表15回以上 ・肯定的感想・意見か 80%以上	* • 21回 • 肯定的意見 89%	様々な発表の機会や課題研究によって、生徒の問題意 識の深化や発表技術の向上 が見られる。	А		を中心に、数多くの発表の機会を設ける など、その内容は充実している。発表に 対する生徒の肯定的意見が高いことから も発表内容や発表技術の向上が窺える。	5
	I. 豊かな感性と、たくましく生きるための健康と体力をはぐくむ	4.英語運用能力の育成	充実	84技能統合型授業およびTOEFL授業の実施 9英語の特別レッスン	・実施回数 ・実施回数	・授業として1、 2年週2回実施 ・理系2回、文 系10回	・1,2年 毎週実施・文系・理系のべ15 回	・授業として、1、 2、3年に実施 ・理系4回、文系6 回のベ10回実施	・1年文理学科、普通科全クラスで週2 回の授業を実施。SETによる授業を2年 は文系週1回、3年は文系選択週2回の授 業を実施 ・海外事前研修、GTEC対策講座などと して実施	・アンケートや感想・各種4技能型英語外部テストの受験者数・特別レッスン参加者数	・81% ・TOEFLITP318 人TOEFL i BT80 人 計398人受験 ・80人	・肯定的意見80%以上 ・GTEC for Student 受験者数360人 TOEFL IBT(チャレンジ含む) 受験者数 80人 ・延べ70人	人、TOEFL i	SETによるTOEFL授業が3年目となり、その成果の学年全体への広がりが見られ、今後の4技能型英語授業の充実が見込まれる。	А	充実	SETの配置により、多くの生徒が TOEFLやGTECを受験し成果をあげる とともに、その成果がすべての英語科教 員に波及し、英語4技能型授業が定着し てきている。また、異文化理解・国際理 解を進めるため、多くの海外スタディツ	
	小項目(はぐくみたい力) ・違いを認め共に生きる力 ・共感力 ・協調性 ・紛争を解決する力 ・健康・体力	5. 違いを認め共に生き る力の育成 (異文化・国際理解)	充実	⑩海外スタディ・ツアー等の充実 ⑪海外生徒との交流や留学生の受け入れ	・スタディツアー参加人数・交流・留学受け入れ人数	・117人 ・81人	• 100人 • 70人	111人参加(一部 予定) +2年全員台 湾修学旅行86人来校交流	・オーストラリア39人、フィリピン20人、 NASA26人 ・3月にスポーツ交流派遣 香港マカオ 男 子バス部26名予定 ・韓国40、豪州13、上海17、他16と生徒 交流来校	・留学フェアー参加者数 ・アンケートや感想による生徒の評価 (肯定的な意見)	・40人 ・肯定的評価が大半	·10人 • 肯定的評価100%	• 4名 • 肯定的評価大半	4技能型英語授業などの成果として、海外進学や留学 トへの関心が高まってきている。	В		アーや留学生の受け入れなどを行っていることは評価に値する。これらの取組により、今年度、海外大学進学者が3人出たことは高く評価できる。 幼稚園や小中学校との交流活動・ボランティア活動は、生徒の社会貢献意識の涵	
学校	・その他	6. 違いを認め共に生き る力の育成 (ボランティア活動 ・地域交流活動)	継続	⑫地域ボランティア活動への参加	・幼稚園や小学校等の世代間交流 (防災宿泊訓練含む)の参加人数・地域中学校と連携した科学教室の実施	・54人 ・110人	40人のべ100人	• 55人参加 • 100人	幼稚園世代間交流や小中学生と一緒の防 災宿泊訓練、2回の科学教室において理 系クラブ員が指導など、多様な角度で実 施。	・アンケートや感想による生徒の評価 (防災宿泊訓練・幼稚園ボランティア) ・アンケートや感想による参加者の評価 (三国丘科学教室)	• 告完的颤体	・肯定的感想が80%以上 ・参加者の肯定的意見 80%以上 ・参加者の増加	• 肯定的評価 100%	ド 学ぶ喜びとともに、学んだことを伝えて指導する体験は、自らの学ぶ姿勢重要な役割を果たしている。	В		養や自らの学習意欲の向上に繋がっている。また、地域との連携を図るという点においても、とても有意義な取組となっている。	₹
独自の取組	Ⅲ. 高い志をはぐくみ、進路 実現をめざす 小項目(はぐくみたいカ) ・規範意識 ・高い志 ・その他	7. 健康・体力・協調性 と豊かな感性の育成	継続	③部活動の振興 ④学校行事の充実	・部活動加入促進・学校行事(文化祭、体育祭、芸術祭、マラソン大会)実施	95%新たな企画実施無事故で実施	• 95% • 内容充実	95%内容充実 無事故で実施	・1, 2, 3年生の入部率 ・各行事は、生徒会が中心となり実施した。文化祭は演劇や後夜祭等で内容充実。 各行事は無事故安全に実施	・大阪府代表や近畿全国大会への参加・出場件数 ・アンケートや感想による生徒の評価	・全国大会11件、 近畿大会10件、 ・肯定的感想が大半	• 5件 • 肯定的評価 9 0 %	・全国8件、近畿 大会7件 ・肯定的感想が大 半	学習面のみならず、部活動等でも多角的に活躍している。(SGH全国4位、科学オリンピック3人、読書体験1人、情報モラル3人:全国、なぎなた・水泳・数学・将棋・短歌、模擬裁判で近畿大会、学生科学賞 学校賞)	A		部活動は加入率が高く、「文武両道」を 実現しており、全国大会や近畿大会への 出場も多い。学校行事も充実しており、 生徒の評価は非常に高い。	
知識基		8. 高い志を育み進路 実現を果たす	継続	(5)社会で活躍する卒業生を活用した講座「三丘セミナー」や各種研究講演会の実施・充実 (6)東京方面キャンパスツアーの実施 (7)大学見学の実施 (8)医療インターンシップの実施	・講座(講演)の開催回数 ・参加人数	・27回 ・20人 ・569人 ・20人	・25回 ・20人 ・450人 ・50人	・30回 ・19人 ・571人 ・28人	・三丘セミナー11回、東大・京大・阪大・市大・府大訪問10回、進路交流会9回 合計30回 ・東大方面キャンパスツアー19人参加・東大19人、京大440人、阪大101人、市大9人、府大2人 計571人訪問・地元病院と大阪大学で3回医師・歯科医・薬剤師体験参加	・難関国公立大学(10大学)への進学者数 (東大、京大、阪大、北大、東北大、名大、九大、神大、市大、府大) ・国公立大学医学部医学科進学者数・アンケートや感想による生徒の評価	・168人(現役117 人) ・10人 ・肯定85%	• 150人以上(現役 100人以上) • 10人以上 • 肯定的意見80%以 上	•160人(現役113 人)	3 高い志をもち、切磋琢磨の 精神で、最後まで頑張って いる。	А	継続	各界で活躍する卒業生による「三丘セミナー」、東京方面や難関大学へのキャンパスツアー、医療インターンシップなどを実施し、生徒の高い志を育んでいる。生徒の参加者数も増えており、評価も高いことからも取組の充実ぶりが窺える。遅刻指導や挨拶運動にも取り組み、その成果として遅刻者数の減少にも繋げてい	
盤社会をリー		9. 規範意識の醸成	継続	(19遅刻指導の徹底 ②の朝のあいさつの奨励 ②リーダーズ研修の実施	・教員による校門指導と 担任、教科担当の指導 ・年間12回の実施	• 日常実施 • 12回実施	校門指導を日常的に実施年間12回の実施	• 日常実施 • 1 2回実施	・校門指導を校長、教頭、若手教員で日常的に実施 ・現在12回実施し、リーダーとしての 資質の向上を図っている。	・ 1日1クラスあたりの遅刻人数	• 0.48人	• O.5人未満	• 0.28人(1,365 件)	5 昨年より更に減少してい る。今後も継続させたい。	А	継続	ె ం	
- ドする人材の奈	IV. 教員の指導力向上をめざす	10.授業力向上	継続	②授業改善に向けての取り組み ②授業観察によるフィードバック ③保護者への授業公開の実施 ③公開研究授業及び研究協議の実施 ②アクティブラーニングやICT機器活用授業の研究 ②他校で実施される研究授業への積極的参加 ②民間教育産業等との連携によるスキルアップ研修参加	・全教員が改善シート提出・全員にフィードバック・年間3回実施・年間4回実施・研修及び授業見学実施回数・参加人数・参加人数	・全教員提出 ・全員フィードバック ・3回実施 ・4回実施 ・他校や予備校等に 30名参加	 全教員提出 全員フィードバック 年間3回実施 年間4回実施 研修4回 見学実施講座10講座 両方で30名 60名 	・全教員提出 ・全員フィードバック ・3回実施 ・4回実施 ・他校や予備校等に 48名参加	・個々人が改善に取り組むのは勿論、科目、教科単位、学年などでも討議して全体として授業力向上に取り組んでいる。 校内授業見学3週間実施。	・授業アンケートによる授業満足度	•84%	・80%以上	80%	授業の相互見学や改善への 取り組みの成果を期待して いる。	В	継続	生徒による授業アンケートを活用した改善シートの提出、授業観察によるフィードバックの他、他校での研究授業の参加や民間教育産業等の連携した研修など、さまざまな授業改善に向けた取組を学校として組織的に行っていることは高く評価できる。	-] Σ
成	小項目(はぐくみたいカ) ・授業力向上 ・教材開発	11. 進路指導力向上	継続	③新旧3年担任を中心とした進学指導研修の実施③各学年業者模試実施後の研修実施②センター試験分析研修の実施	・実施回数 ・実施回数 ・実施回数	3回実施4回実施1回実施	・年間1回 ・年間3回 ・年間1回	• 3回実施 • 4回実施 • 1回実施	担任の進路スキルの向上を図るために各 種分析報告会や研修を実施。	・難関国公立大学(10大学)への進学者数(東大、京大、阪大、北大、東北大、名大、九大、神大、市大、府大) ・国公立大学医学部医学科進学者数	・168人(現役117 人) ・10人	・ 150人以上(現役 100人以上) ・10人以上	・160人(現役 113人) ・8人	高い志をもち、切磋琢磨の 精神で、最後まで頑張って いる。	А	6.00 6. 	また、担任の進路指導の向上をめざした 研修や業者模試・センター試験分析会な どを組織的に行っていることも進学実績 の向上に寄与しているものと考えられ	<u>`</u>
	・その他	12. 初任者・転入者に対する 指導力向上支援	継続	③校内研修の実施	• 研修実施回数	•80	• 100	• 1 1 🗆	三究会(若手の勉強会)5回、人権研修、救急法、進路指導、課題研究などさまざまな内容にわたって研修や他校への視察を実施。	・初任者、転入者に対する生徒の 授業満足度の向上	0.56%向上	・授業アンケート肯定 的回答率1%以上の向上	包.75%向上	初任者および転入者の授業 に対する生徒満足度が微増	В	継続	る。 さらに、若手教員や転入教員への勉強会 などの実施により、授業アンケートの結 果が向上していることも評価に値する。	
		⑬10校が共通で実施する学力調 査								学力調査の結果	1年⇒2:	年:-1.05(C)、2年	≅⇒3年:-0.15(△	4) *詳細は評価審議会資料	3に明記	2	学力調査の結果において、特に1年から 2年でマイナスが大きいことについて、	
	V. 総合的な学力の測定	⑭大学入試センター試験への参 加								大学入試センター試験 5教科7科目受験者の割合	90.0%	85%	85.7%		А		分析のうえ、改善策を検討してもらいたい。 大学入試センター試験5教科7科目受験 者の割合を高く維持しながらも、得点率	Α
		⑮大学入試センター試験の結果								5教科7科目受験者における得点率8割 以上の者の割合	25.0%	30%	30%		В		8割以上の生徒の割合が前年度実績を大きく上回ったことは高く評価できる。	
		⑯課題研究活動								校外での研究発表グループ数	36グループ	30グループ	29グループ	SGH14、SSH2、大阪サイエンス3、学生科学5、生物 2、化学1、GL1、司法1	В		課題研究については校外での研究発表数、府や全国規模のコンクール・コンテスト等の受賞者が昨年度実績を下回ったが、またが持ちが持ちがある。	-
	Ⅵ. 課題研究活動	⑪コンクール・コンテスト等の 成果								府や全国規模のコンクール・コンテス ト等の受賞者数	38人	30人	35人	SGH13、物理2生物1 数学1情報3、法学5、読 書等8、GLHS2	А		が、高い数値を維持していることは評価できる。 特に、SGHの取組については評価が高く、実績を残している。	
共通の開		⑱TOEFLiBT(チャレンジを含 む)								TOEFLiBTスコア(チャレンジを含む) ①80点以上の人数 ②60点~79点の人数	①2人 ②7人	①1人以上 ②4人以上	①7人 ②5人		А		TOEFLiBTチャレンジやGTECのスコアにおいて優れた結果を残したのは、 SETを配置により英語科として取り組	
組		⑩TOEFLiBT(チャレンジを含 む)以外の英語外部検定試験								GTEC for Studentsスコア (1年全員受験)	_	Grade 7: 5名 Grade 6: 50名 Grade 5: 100名	Grade7:5人 Grade6:26人 Grade5:200人		В		んできた成果であり、評価に値する。 今後もこれまでの取組を継続・発展させ ながら、生徒の英語4技能の向上に尽力 してもらいたい。	
		⑩スーパーグローバル大学(タ イプAトップ型)13校への進 学								スーパーグローバル大学(タイプA トップ型)13校への進学者数(1浪 含む)	75人	80人	82人	北大1、筑波大2、東大1、 東工大2、名大1、京大 24、阪大43、早大3、慶大 3	В		国公立大学現役進学者数やスーパーグ ローバル大学13校への進学者数が前年 度実績を上回ったことは高く評価でき	
	Ⅷ. 進学実績	②進学実績								難関国公立大学等(東大、京大、阪 大、神大、市大、医学部医学科)の全 合格者数(現役・浪人)	133人	130人	132人	東大1、京大25、阪大43、 神大19、市大38、上記以 外国公立医学部医学科6	В		る。 また、2名の生徒が海外大学に進学した のも、これまで海外スタディツアや海外 生徒との交流や留学生の受け入れを行っ てきた成果だと考えられ、高く評価でき	AAA
		②国公立大学への進学③海外大学への進学								国公立大学現役進学者数 ーニーニーニーニーニーニーニーニーニーニーニーニーニーニーニーニーニーニーニ	158人	140人	156人	デルフトエ科大学(オランダ)1 ウースター大学(米国)1	A		る。 今後も継続して実績を向上させることが できるよう、教科指導・進路指導の充実 を図ってもらいたい。	r

総合評価

三国丘高校では、「文武両道」「自主自立」「切磋琢磨」の三丘スピリットを伝統として受け継ぎながら、各界で活躍する卒業生による「三丘セミナー」や海外スタディツアー、TOEFLを取り入れた英語4技能統合型授業や英語の特別レッスンの実施など、高い志を育み、学力向上を図る多彩な取組を行っている。また、SGHの取組では「高校生ビジネスグランプリ」で全国1位をとったり、SGHフォーラムで全国4位となるなど、研究内容や発表方法についてはとてもレベルが高く、優れた実践を行っている。SSHにおいても、物理オリンピックや生物オリンピックで優秀な成績を残している。さらに、GLHSの指定を受けて以降、教員の授業力向上をめざし、学校として組織的にさまざまな取組を進めており、成果をあげている。今後も、国際的に活躍するグローバルリーダーの育成をめざし、これまで行ってきた取組を継続し発展させてもらいたい。

府立岸和田高等学校

 自己評価の基準
 A・・・計画以上
 評価審議会
 評価審議会
 A・・・高い成果をあげている

 A・・・高い成果をあげている
 A・・・成果をあげている

 B・・・取り組んでいるが工夫改善の余地がある
 B・・・取り組んでいるが工夫改善の余地がある

 C・・・取組の見直しが必要である

資料2-7

ī							実績	実績の詳細	評価	成果指標	前年度実績		実績	実績の詳細	自己	取組方針	コメント	評価
 	. 確かな学力の向上を図る 「「はぐくみだい力」 - -	①・言語活用能力 ・英語運用能力	充実	英語で表現する。外国人大学生とのグループワーク(英語でのディスカッション&プレゼンテーション) ①GL養成プログラム校内版 ②GL養成プログラムUCバークレー版 ③イマージョン型語学研修オーストラリア	• 参加者数	①40 ①42名 ②20名 ②334名 ③30 上	①36名 29名	①5H×4日間の研修、海外大学生と議論。英語プレゼン能力が向上。この研修がもとで昨年は米国大学に、今年は阪大の適塾入試に参加者が合格②小論文で選抜。事前事後研修5回。現地では9時~21時で5日間、英語の議論・発表、各種アクティビティ実施。「将来について」英語でプレゼン③イマージョン型研修に。事前事後研修5回。英語でのプレゼンやクイーンズランド大学も訪問。	A A	アンケートや感想による生徒の評価 (肯定的な意見) 「英語研修プログラムに満足してい ますか。」	①100% ②95% ③97%	90%以上	①100% ②100% ③100%	①「とても満足」が72%。83%が留学生との様々な活動が非常に刺激になった。事前64%→事後83%に自分は価値ある存在だと思うと回答 ②「とても満足」が56%。73%がプログラムに参加して英語に自信がついた、82%が英語への学習意欲が増したと回答 ③「とても満足」が87%。80%がプログラムに参加して英語に自信がついた、100%が英語への学習意欲が増したと回答	E A	継続	オーストラリア語学研修のほか、 UCバークレー校での研修に加え、 校内でも海外大学生と議論する機会 を設けており、参加した生徒全員が 英語の学習意欲が高まったと回答し ている。	
	・読解カリテラシー・科学的リテラシー・英語運用能力・その他	②・学習習慣の定着 ・基礎学力の向上	新規	自学自習の習慣の育成プロジェクト ①土曜講習(特進ゼミ)・サポート講習(成績不振者)等 ②土曜午前の学習への取組支援 ③自習室開設での自学自習の支援(土日祝)	①開講回数 ②学習に取り組んだ生徒の割合 ③開設日数	① のへ ①新規 ②新規 ②140日 上 ③140	%以 ②74% ②1300	②1年生講習を目標と実施スケージュールを明確にし保護者にも伝え全回の出席を義務づけたものにリニューアル。次年度から導入予定の「岸高スーパークラス」の取組を先行実施 ③教員の時間外勤務縮減をめざして開設日を精選した。	ā A	アンケートや感想による生徒の評価 (肯定的な意見) 「講習や千亀利セミナーなど、土曜 日の午前は充実した学習時間を過ご している。」	52.7%	55%以上	54.7%	1年58.1%、2年48.7%、3年57.3%と、1年生への初期指導は成果をあげた。9月以降、1年生で登録制の土曜講習を実施し、参加率が向上した。反面、2年生での学習意欲の低下に対して方策が必要。土曜午前に学習に取り組んだ割合と20ポイントほど乖離が見られる。生徒が達成感を得られるような課題や講習の形態が必要。	A	継続	卒業生による学習支援(千亀利セミナー) や土日の自習室開放、土曜講習や成績不振者に対する補習など、丁寧な指導を継続して行っていることは評価に値する。	AA
		③・ICT活用力 ・科学的リテラシー ・読解カリテラシー	継続	新たな大学入試で求めらる力を育成 ①プロジェクト型学習の実施(教科「情報」1年) ②「岸和田スタイル」学年・教科の授業到達目標を設定 ②朝読タイムの実施	①参加生徒数 ②目標設定・進捗・振り返りの3 回の教科会議 ③1週当たりの時間数	①360名 ② 3回 ③75分 375分	230	① I C T 活用力の育成し、課題研究発表会のスキルアップ②教科で振り返ることで課題を共有し、苦手分野への対策等を教科で協議した。③全学年で毎朝始業前に実施。担任副担任が指導。各教室に朝読文庫を設置。1年普通科5クラスがビブリオバトルをクラスで実施。代表を選出し学年大会を実施予定	A	アンケートや感想による生徒の評価 (肯定的な意見) 「プロジェクトを通して主体的に学 び、考え、実践する。」	89.0%	90%以上	90.5%	プロジェクトで問題が生じた場合、91%の生徒が級友とコミュニケーションをとりながら解決を図った。そのうちの38%はインターネットや書籍などで自分なりに解決方法を探していた。	, A	継続	ICT活用能力やプレゼンテーション能力の育成をめざした取組や「岸和田スタイル」として学年・教科の授業到達目標を設定するなどの取組も進めている。	
く生	. 豊かな感性と、たくまし 生きるための健康と体力を ぐくむ	④・違いを認め共に生きる力 ・共感力 ・協調性	新規	姉妹校「台湾市立景美女子高級中学」などと相 互交流リンガフランカ体験(母国語が英語でないもの同士の共通言語英語での意思疎通) ①岸和田高校での1日バディ交流 ②台湾での交流(修学旅行での1日バディ交流)	①バディ交流をした生徒数 ②参加人数	① 新規 ①80 ②320人 ②36)人 (154人 (2360人	①自分たちの地域や活動を英語で説明することで、自らに対する理解が深まった。姉妹校は全員参加の修学旅行ではないため、来校人数が流動的②英語を共通言語として、1:1のパディ体験を全員が丸1日体験することで互いの文化の理解を深めた。加えて、両校がSSHの研究を英語で発表する機会を持った。	A A	アンケートや感想による生徒の評価 (肯定的な意見) 「海外研修はいかがでしたか」	94.2%	90%以上	95.1%	姉妹校提携し、毎年4月は岸和田で、10月は台湾で交流。訪日の人数が年によって増減する。リンガフランカ交流が深まり、英語学習のモチベーション向上に繋がっている。生徒全員が最低2回1:1の交流の機会を持っている。	А	継続	台湾の姉妹校の高校生との英語による相互交流を校内及び台湾修学旅行期間中の年2回実施することで、よ	
· 小項 	N項目(はぐくみたい力) 違いを認め共に生きる力 共感力 協調性 粉恵を解決する力	⑤・違いを認め共に生きる力 ・共感力 ・協調性	継続	地域との交流で学ぶサービスラーニング(家庭科のカリキュラムに組み込んで)・社会貢献①岸城幼稚園との1年を通しての授業での交流②岸高祭や岸高桜祭の開催	①参加生徒数 ②岸高祭の観客動員数 岸高桜祭の来場数	①320人 ②3500人 ·550人	23500	①相手の立場や発達に応じた対応ができるようになった。高校生が企画運営する場面が増加。地域小学生対象「岸高こどもクッキング」を3回実施、ロータリークラブが後援してくれた。②岸高祭では3年生全クラスが演劇に挑戦し多くの保護者が参観。岸高桜祭で近隣住民に教育活動や部活動を紹介した。	A	アンケートや感想による生徒の評価 (肯定的な意見) 「学校交流はいかがでしたか」	90.5%	90%以上	91.0%	幼稚園との交流で立場による意見の違いに気づく生徒が多く見られた。災害時の共助意識が高まった。こどもクッキングは、3つの小学校から、毎回32名、計96人が参加。ボランティアスタッフとしてOBOGが30名程度毎回参加。毎回応募者が多く先着順にしているが、小学生の保護者から回数増の要望多。	3 . A	継続	り交流を深めている。英語学習のモ チベーション向上に繋がっており、 とても有意義な取組だと言える。 部活動のリーダーを集めた研修を実 施するなど、部活動の活性化にも努 めている。また、「こどもクッキン	А
学にを	健康・体力 その他 	⑥健康・体力をはぐくむ	再編	クラブ活動の振興と学校行事の充実 ①クラブ活動の活性化 ②体育祭の実施 ③鍛錬遠足の実施 ④クラブリーダー研修の実施	①クラブ加入率 ②体育祭参加率 ③鍛錬遠足参加率 ④実施回数	194% 299% 398% 4 20	以上	①複数クラブに所属する生徒が増えた②実施種目の提案など生徒の主体的な運営がなされた。③台風の影響で歴史博物館見学に変更。④意欲向上に関する研修を実施し、勉学との両立に対する理解を深めた。キャプテンが文武両道の実践例を紹介するなど、司会進行も生徒が行った。		①アンケート感想によるクラブ満足度「クラブ活動に熱心に参加している。」 ②行事満足度(肯定的な意見) 「学校行事に楽しく参加している。」	183.5% 282.9%	80%以上	①90.3% ②84.4%	①少林寺拳法で全国大会、水泳、卓球で近畿大会。理数系クラブ合同の「サイエンスカフェ」6回開催。また、4回学校説明会(校内実施)のオープニングには、ブラスバンド部、音体部、合唱部がパフォーマンスを披露。②体育祭での応援パフォーマンスで、学年を超えた連携をおこなった。	A	継続	グ」には多くの地域の方がボラン ティアとして参加するなど、地域と の交流活動にも積極的である。	
実現 , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	現をめる 9	⑦高い志での進路実現	継続	高い志でのキャリア構想 ①OBOG職業講話・進路講演の実施 ②大学教授の出前授業の実施 ③PT(東大京大等難関大学向け講座)の実施 ④京大・阪大キャンパスツアーへの参加促進	①実施回数 ②・のべ授業参加数 ・講座数 ③参加人数 ④のべ参加人数	① 7回 ②1360人 ·20講座 ③22人 ④84人 ④80	60人 禁座 人 ②440人 21講座 320人	①1年の夏にOB8人による体験講話を実施。3年生には現役国公立合格した先輩を招いて体験談を聞かせ、高い志を最後まで持つ大切さを体感させた。②参加教授を増やし分野を拡大した③各教科の個人指導とともに、情報交換を適宜実施④地理的な要素を勘案してバスを利用。実施時期により参加人数が増減する。	A	アンケートによる生徒の評価(肯定 的評価) 「将来の進路や職業などについて、 講演会や説明会を実施するなど適切 な指導を行っている」	新規	80%以上	84.6%	大学の教授による講演は、1年2年ともに文系理系の物を自由に選択できる。1年の早い時期(5月に) 先輩の職業講演も10人来校(生徒にできるだけ近い年代の30代前半)を2つ聞けるように工夫をしている。国際機関で勤務している人の講演を通じて、他国で働く意識を涵養すると共に、キャリア形成についての理解を深めた。		継続	卒業生による講話や大学教授による 出前授業を実施し、生徒に高い志と 進路希望実現をめざす学習意欲を育 んでいる。またグローバルな広い視	
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	規範意識 高い志 その他	⑧・規範意識 ・主体性の育成 ・協働性	新規	自他の気持ちを尊重する心の涵養と規律規範の確立 ①合唱コンクール(1年2年)芸能祭演劇(3年) ②生徒による朝の挨拶運動の実施 ③登校マナー指導の実施	①参加クラス数 ②③実施回数	①合17クラス 芸9クラス 芸82 ②新規 ②年3 ③年60回 3年60 上	サラス 芸8クラ	①練習は、授業開始前と昼休みのみとしているので、限られた時間を有効活用してよく練習をし、時間管理能力や仲間意識が高まった。インフルエンザによる学級閉鎖で1クラス不参加。②自治会指導部を中心に実施③強化指導週間を設け、全教員で実施。		アンケートや感想による①生徒「文化祭などの学校行事に楽しく参加している」②保護者の評価(肯定的な意見)「社会人としてのモラルを守る生徒を育てようとしている。」	182.9% 285.7%	85%以上	184.4% 285.3%	①文化祭をはじめとして、クラスマッチや合唱コンクールにおいても熱心に練習を重ね、達成感を抱いている。②自治会によるあいさつ運動が定着した。提出期日などルールを守るよう学校全体で指導している。	А	継続	野を持たせるための講演会やサイエンスツアーなどを企画しており、こうした取組を3年間の人材育成プログラムとして生徒に示し意識付けを行っていることは評価できる。 登校マナー指導や生徒による挨拶運	Α
知 識 		⑨・高い志・社会貢献	新規	グローバルな広い視野の構築 ①GLHS講演会の実施 ②サイエンスツアーの実施 ③普通科希望生徒対象の課題研究の実施 ④姉妹校との台湾フィールドワークの実施	①実施回数 ②のべ参加人数 ③参加人数 ④参加人数	①2回 ②180人 ③新規 ④新規 ④10.	O人 ②180人 ③5人 人 ④10人	①国際機関で働いている人からこれまでのキャリアについて 講演②国内(JAXAとJAMSTEC)米国(国立ローレンツ研究所BELLA、シトリスセンター)③大学と連携して実施④台湾鳥学会とも連携、姉妹校生徒21人教員4人も参加。修学旅行訪問時に英語で成果発表。	A	アンケートや感想による満足度 (肯定的な意見) 「今回のプログラムはいかがでした か。」	95.0%	90%以上	95.0%	①海外での活動への関心が高まった。②最先端の科学に触れ、 興味・関心が高まった③調査前④姉妹校の生徒と英語を介して 調査を行ったことで、生物への興味に加え海外の生徒と交流す ることに意欲が高まった。	А		動などにも取り組み、保護者からも 評価を得ている。	
整 IV. す	,教員の指導力向上をめざ	⑩授業力向上	新規	①公開授業週間の設定 ②生徒による授業評価実施 ③ICT機器の活用とAL型授業の導入 ④AL型授業に関する研修の実施	①教科毎に1週間 ②実施回数 ③活用教員数 ④実施回数	①教科ごと に1週間 ②2回 ②計62名 ④新規 ②2回 ③計62名 ④新規	1週間 22回	①各教科1名研究授業を実施し校外へも案内③自己申告票の「授業力」の項で目標設し、全員が取り組んでいる。i,④京大溝上教授の講演と希望教諭2名の授業分析。AL型授業事例発表会でポスター発表。同教授のHPで、優秀実践事例として公開されている。 ①口頭9本、ポスター105本②論文集にまとめて製本し、後	Ě A	授業満足度(授業アンケート) 「授業に満足している。」 探究発表会などの発表や課題研究の	75.4%	80%以上	80.6%	生徒意識2「授業を受けて、知識や技能が身に付いたと感じている」の肯定的回答率が第1回の80.3%から80.6%に微増。 AL型授業に関する研修などで、生徒の気質に合った授業改善の結果、全体的な底上げができた。	Α Α	継続	ICT機器の活用とアクティブ・ラーニングを取り入れた授業の実践をめざし取り組んでおり、その成果が生徒の授業満足度などにも現れてきている。 課題研究については、今年度新たに	
ド · j	ハ項目(はぐくみたい力) ¦ ・授業力向上 ・教材開発 ・その他	⑪教材開発 •	新規	①2年探究発表会の実施 ②3年キャリアスタートゼミでの論文作成 ③ルーブリック評価の作成	①探究発表本数・□頭発表本数・ ポスター発表数 ②論文本数 ③生徒への提示回数	①ロ頭9本、 ポスター100 本 ②新規 ②新規 3新規 33回	表) ②97本	輩たちの参考文献として蓄積。③ルーブリック提示が定着し、生徒がどのようなことが求められているを意識して研究するようになり、内容が深まってきた。また、論文については、推薦型の大学入試の提出物に活用する生徒が出てきている。		達成感 「わかった、なるほどと思ったことがあった」(アンケートの肯定的な意見)	76.0%	70%以上	76.1%	今年度から、3年次論文にまとめることを理科の生徒全員と文利の一部の生徒で実施している。優秀なものは、論文集として製本し学校の記録として保存し、本人たちにも贈呈した。課題研究の成果を生かして阪大適塾入試に合格している。		継続	文系・理系あわせた「課題研究論文 集」を作成し、生徒の意識向上に繋 げている。また、課題研究には多く の教員が関わり実施していること、 課題研究を普通科の生徒にも広げよ	AA
 材の 育 成	; 	⑫初任者等経験の浅い 教員の指導力向上	継続	経験の浅い教員向け校内研修の実施	研修の回数	年間9回 年間9上	9回以 9回	2回は10年目教員をメンターにして実施し、初任者と経験 10年目までの教員も参加し、25~30名の規模で実施している。アドバイザーとして指導教諭や首席とのベテランも参加。校外での教科研修にも参加。校外への初任者授業公開を実施。	A	アンケートや感想による教員の評価 「本研修で知識は広がりました か。」	100%	75%以上	100%	分掌や委員会からのレクチャーを通して、期待される業務についての理解を勧めた。初任者全員が授業を校外へ公開し、多くの意見を得た。次年度は複数回の研究授業を検討したい。広報活動を通じて、本校の特色の理解を深めた。3学期には、「課題研究」の教科書の著者を招き、研修を行い、その後軽軽の浅い教員向けの自主講座を教員が企画実施した。		継続	うと取り組んでいることは評価できる。 経験の浅い教員向けの研修は、内容 も充実しており、また多くの教員が 関わることで、とても有意義な取組 となっている。	
		1310校が共通で実施する学力 調査								学力調査の結果		1年⇒2年:-	1.21 (C) 、	2年⇒3年:-0.41(A) *詳細は評価審議会資料3に	明記		学力調査の結果において、特に1年	
V.	,総合的な学力の測定	⑭大学入試センター試験への 参加								大学入試センター試験 5教科7科目受験者の割合	245名 68.4%	240名 75%	235名 73.2%	文理学科124名(文科48名/理科76名) 普通科111名(文系56名/理系55名) 8クラス規模のため人数は減だが、比率はやや回復。昨年度に引き続き、早慶や関関同立などの有名私大専願志望者は増加傾向。その影響でセンター試験受験者が減。	В		から2年でマイナスが大きいことについて、分析のうえ、改善策を検討してもらいたい。 大学入試センター試験5教科7科目の得点率80%以上の受験者の割合	А
	,	⑮大学入試センター試験の結 果								大学入試センター試験の 5教科7科目の得点率80%以上の 受験者数(割合)	35名 9.8%	30名 9.3%	41名 12.8%	文理学科34名(文科18名/理科16名) 普通科7名(文系6名/理系1名) 800点以上4名 昨年度と比較して全国の平均点は大きく変わっていないのに対し、本校文系900点の平均点が昨年比+15点。 英語筆記が、3年連続+30点以上(全国平均比)となった。	А	継続	が前年度実績を上回ったことは評価 できる。この結果を分析し、次年度 以降の取組にも活かしてもらいた い。	
	=#1857# <i>ct</i> p\x . \$\$	⑯課題研究活動								ルーブリックを用いた観点別評価 を行い、研究活動の質の向上と、 適正な評価を行う。	78%	80%以上	100%	課題研究すべての講座で導入した。研究課題の設定・研究の内容・発表の内容について活用している。ロ頭発表時やポスター発表での留意点に生徒間の評価でも活用しており、プレゼンの技能も向上した。 旺文社全国学芸サイエンスコンクール1名、日本鳥学会高校生	А	継続	ルーブリック評価を取り入れたことで、発表内容やプレゼンテーション能力が向上していることは評価に値する。	D
共	,課題研究活動	⑪コンクール・コンテスト等 の成果								全国規模のコンクール・コンテス ト等の参加者人数	139名	30名以上	144名	ポスター発表4名、SSH生徒研究発表会4名、ジュニア農芸化学会2名、化学工学会6名、全国高校生創作コンテスト2名(伊藤原本)	[≜] A	継続	全国規模のコンクール・コンテスト 等の参加者数も増えており、今後も 丁寧な指導を行うことで、課題研究 のさらなる充実を図ってもらいた い。	В
の 取 組 WI.	,英語運用能力	⑱TOEFLiBT(チャレンジを 含む)								TOEFLiBTスコア(チャレンジを 含む)	42人が40 点以上 (1年)	59人中6人以上が 60点以上 42人以上が 40~59点以上(2 年)	が60点以上、 24人が40~ 59点以上	最高点は、80点。71点以上は、4名。 60点以上の上位者層の目標を達成した。平均は、40.9点。機械の調子が得点に影響しており得点が伸びなかった生徒も多い。 2級の合格率は、56.4%、準2級の合格率は、91,2%	В	継続	TOEFLiBTチャレンジにおいて成果をあげたと考えられる。英検においても2級の合格者を多く出すなど、英語の授業などでの取組の成果であ	AA
		⑨TOEFLiBT (チャレンジを 含む)以外の英語外部検定試 験								英検:合格者数	準1級2名 2級28名 準2級38名	2級30名 準2級50名	2級66名 準2級106 名	1年2年とも英語でのディスカッションやプレゼンテーション等を授業で取り入れており、生徒は授業の形態に充分適応している。 センター80%以上の割合は文理学科導入以来、最高であっ		継続	ると考えられる。今後も継続して生 徒の英語運用能力の育成に努めても らいたい。	
		⑩スーパーグローバル大学 (タイプAトップ型)への進 学								スーパーグローバル大学(タイプ Aトップ型) 13校への進学者数 (1浪含む) 国公立大学&主要私大(早稲田・	39名 (現役 18)		32名 (現役16名)	た。医学部医学科に現役2名合格。秋田国際大学に現役1名が合格。他、上位者が医学部医学科志望であった。京都大学志望が現役が9名、例年より多かったが、1名しか合格しなかった。早大の合格者も含め、浪人の数が例年より10数人多い。	B B		国公立大学現役進学者数では昨年度 実績を大きく上回り、成果をあげて いる。スーパーグローバル大学13 校への進学者数は日標に達しなかっ	
VIII.	,進学実績	②進学実績								慶応・上智・東京理科大・ MARCH・関関同立・同女・薬学部・歯学部・医学部)現役進学者 数		187名(前年度より卒業生減8クラス規模)		国公立への現役進学者は、卒業生は例年より多く1/3以上であるが、関関同立の数は、私学の定員適正化の影響があると思われる。			校への進学者数は目標に達しなかったが、医学部医学科に現役2名、秋田国際大学に現役1名が合格したことは評価に値する。 高い本語のでは、学習意欲をさらに	А
	-	②国公立大学への進学								国公立大学現役進学者数		107名(前年度 より卒業生減9 クラス規模)	123名	卒業生の数は、例年より40名少ない年で320名だが、国公立追学が1/3以上の割合になり進学実数も増加している。例年より多い割合である。	Ĕ A	継続	高め、進路希望を実現する生徒が増加するよう、今後も生徒への指導と 取組の充実を進めてもらいたい。	
		③海外大学への進学 日本								海外大学進学者数(1浪含む)	1名	1名以上	O名	希望者が今年度はいなかった		継続		

岸和田高校では、校長先生のリーダーシップのもと、学習内容や学習時間などを記録できる学校独自の「岸高手帳」、課題研究の成果として取りまとめ製本する「課題研究論文集」など、次々に新たな取組を導入している。UCバークレー校での研修、台湾の姉妹校高校生やドイツの高校生との英語による相互交流などもその一つであり、現在は、ICT機器の活用とアクティブラーニングを取り入れた授業の実践にも熱心に取り組んでいる。これらの取組について、中学生の保護者からは「斬新」であると評価されたとのことである。もちろん、以前から行ってきた土日の自習室開放や土曜講習など、面倒見の良い指導も継続している。今後も、新たな取組を取り入れながら、リーダーシップや英語運用能力、コミュニケーションカ、プレゼンテーションカなどを身に付け、将来、グローバルにたくましく行動できる人材の育成に努めてもらいたい。